

特別号

INMP 通信 No. 18
2017年4月



International Network
of
Museums for Peace

INMP 創設 25 周年記念号

平和のための博物館 (INMP)通信は、年に4回発行され、INMP 会員による記事を含め世界の平和のための博物館に関するニュースや情報がたくさん載せられています。今回の特集号は INMP の 25 周年記念を祝う内容です。今号は、国際ネットワークの歴史や団体・個人からの祝辞、INMP 会員や理事、編集者が関わった出版物から成っています。役員の紹介も大まかにされています。

平和のための博物館国際ネットワーク (INMP) の 25 年の歴史 (1992—2017) と、 寄付者、スポンサー、ボランティアへの謝辞

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン Peter van den Dungen
INMP 統括コーディネーター (1992—2017)



平和のための博物館国際ネットワーク (INMP)は、多くの個人や団体の協力や支持がなければ今日まで存続することはできなかったでしょう。従って INMP 創設 25 周年記念に、その後援者、寄付者、スポンサー、ボランティアの方々に注目することがふさわしいでしょう。彼らは平和運動を持続させる「平和の篤志家」と言われています。過去にそうであったように、今日においてもそうなのです。19世紀始めに組織された平和運動が生まれて以来、それは時間、才能、エネルギー、熱意、経済的資源を提供してきた個人の寛大さにかかっています。200年後の今日でもそうなのです。平和と非暴力の文化の発展のために活動している草の根

の平和団体の重要性は広く認められていますが、それが最小限の財政的資源で行われていることはそれほど知られていません。国連元事務総長のバン・キ・ムンの言葉「世界には軍備が過剰にあるが、平和の取り組みの資源は足りない」はよく引用されています。この言葉は、世界にある数えきれないほどの個人や彼らの運動、組織の取り組みにも当てはまります。もっと平和な世界を実現しようとするこのような努力は印象的ですが、もしもっと多くの財政的支援があればさらにそれは可能になるでしょう。平和博物館やそのネットワークが取り組む平和教育においても、同様なことが言えます。



英国ブラッドフォードでの 第一回国際平和博物館会議：1992年

INMPは、1992年9月、英国のブラッドフォードに第一回平和・反戦博物館国際会議が開催された時に創られました。会議は「平和にチャンスを与えよ」というクウェーカー教徒の小さな慈善団体によって、ブラッドフォード大学（平和学部）で組織されました。クウェーカーというキリスト教の小さい教派（正式にはフレンド派：Religious Society of Friends）が17世紀中頃イギリスで誕生して以来、奴隷制や戦争の廃止を含め社会的改革の前線で活動をしています。彼らは「平和への道などない。なぜなら平和こそが道だから」という信念に従い、20世紀になってユネスコが取り上げる何世紀も前から、平和の文化の促進のために活動をしています。その団体は1986年に教育の慈善団体として創設されましたが、英国の平和運動の歴史を伝え、人々が今日の平和運動に参加するのを励ますような平和博物館を創設することが目的でした。その会議の目的は、現存する平和博物館の経験から学び、国立の平和博物館を創るプロジェクトを推進することでした。会議後平和博物館プロジェクト事務所が、市の支持を得てブラッドフォードに開設されました。

その後の10年間に平和ギャラリー、そして平和博物館が創設されました。それは主にクウェーカーや他のボランティアの財政的な支えなどで実現して今日に至っています。

会議の参加者は、今後連絡を取り合いお互いに助け合うゆるやかなネットワークを作ることでも決めました。平和博物館国際ネットワークは、クウェーカー教徒によって支えられ、ネットワークの通信の出版や郵送を国際的に行いました。その出版物で会議のない間会議の参加者や博物館が連絡を取れるようにしました。

国際会議は3年に一回開催することが合意され、それは大体守られてきました。「平和にチャンスを与えよ」という団体の創設者で事務局長のジェラルド・ドゥルイット氏が国際ネットワークを1992年から2002年まで約10年間特別なプロジェクトとして位置付けて来られ、大変感謝をしています。この間通信が15号発行されました。（1993年5月から2002年10月まで）それらは次のウェブサイトで見るができます。

www.museumsforpeace.org/news/newsletters.html

第1号はわずか4ページでしたが、最後の号はその10倍のページ数になっていました。これらの初期の通信はイラストなしで編集されましたが、様々なできごとの情報交換をするのに良い考えを提供しました。例えば、博物館への訪問や旅、展示物の交換、計画された新しい博物館、最近の出版物、ネットワークの会員による記事（自由投稿原稿や招待記事など）を含んでいました。また「平和にチャンスを与えよ」という団体は、第一回国際平和博物館国際会議についてイラスト

ト入りで多くの報告を含んだ冊子を出版しました。それは『平和を人々にもたらす：1992年9月10-12日世界の平和博物館、反戦博物館、関連団体の館長とスタッフの会議』と題して、すべての報告の要旨を含んでいます。それは平和博物館や平和関連博物館の名前と所在地を含んでおり、後にネットワークが作成することとなる平和博物館要覧の先駆となるものでした。

第2回会議 スタッドシュレイニング (オーストリア) 1995

第1回会議の主催者は、すべての期待を上回る「大成功で感動的な出来事」と言及しました。ゆえに第1回会議に参加した多くが第2回会議にも参加したことは驚くべきことではありません。それはオーストリア平和と紛争解決研究センターの代表のジェラルド・メーダー博士からの招待でした。会議は、1995年8月にセンターのあるオーストリア、ブルゲンラントのシュタットシュレイニング村で開催されました。

第1回会議と同様、この会議もまた世界各地への平和博物館の設立を進めることを意図していました。



シュタットシュレイニング村

会議は、主催側の要請により、ヨーロッパの平和教育に重要な貢献をする「平和のためのヨーロッパ博物館」をこの村に建設する

という、オーストリア平和と紛争解決研究センターのプロジェクトを支援するアピールを発表しました。このアピールは、自治体、州政府、オーストリア連邦の教育文化省と同様、科学研究芸術省に対して行なわれました。博物館は2001年にオープンしましたが、それに先立って「戦争か平和か：暴力のカルトから平和の文化へ」という大きな展示会が、ブルゲンラント州政府の公式な展示会として2000年にこの城で開催されました。シュレイニングに開設された平和大学は市民の平和維持と平和構築のトレーニングセンターと博物館ともども、この村を世界的な平和紛争解決の学会、教育者、学生、トレーナーと活動家の間で有名にしました。



第2回会議の参加者

初期の出版物

平和博物館に関する記事は、1990年代平和雑誌と同様博物館雑誌に現れはじめました。例えば、第1回INMP会議後、2つの記事がイギリスの博物館協会発行の *Museums Journal* の1993年7月号に登場しました。同じ雑誌の1997年1月号には現存および設立予定の平和博物館のネットワークメンバーの貢献とともに、テレンス・ダフィ氏編

集の特集を含んでいます。同年、氏は *Museum International* (UNESCO) にいくつかの記事を書きました。ダフィ氏は機会あるごとに北アイルランドのアルスター大学で平和学を教え、アイルランド平和博物館プロジェクトを主導しました。平和博物館の記事は、また、平和雑誌でも現れはじめました。例えば、国際平和研究学会(IPRA)の平和教育部会(PEC)の機関紙 *Peace, Environment and Education*, (平和、環境と教育)の1993年12月号に3つの記事が掲載されています。彼らはまた同時に *Peace museums: for peace education?* (平和博物館: 平和教育のためか?) のタイトルのブックレットを、編集者と PEC のコーディネーターのアク・ベルステッド教授の補足資料とともに発行しました。1995年10月には、平和博物館の最初の要覧である *Peace Museums Worldwide* (世界の平和博物館) の登場を見ます。それは、ドイツ・リンダウの平和博物館の館長トーマス・ウェッチ氏と息子のレオンハルト氏の準備作業がもとになっています。その出版物は、ジュネーブの国連図書館の国家資料と歴史収集ユニット連盟のチーフで国立博物館連盟の代表でもあったウルスラーマリア・ルーサー氏によって準備されました。第2版はネットワークの第3回会議を含んで1998年9月に発行されました。



Peace Museums Worldwide (1995)
(世界の平和博物館)

国連との提携

1997年、INMPはニューヨークの国連広報局(DPI)の非政府組織委員会の承認に続き、DPIの登録団体として認められました。この認定は同市のメトロポリタン平和博物館プロジェクトの設立者・代表であるスタンフォード・ヒンデン氏のイニシアティブと努力の結果によるところが大です。DPIのINMP代表は、後にニューヨーク大学で人権を教えるジョイス・アプセル氏によって引き継がれましたが、彼女は2016年、平和博物館に関する初の単行本 *“Introducing Peace Museums”* (平和博物館紹介) を発行しました。彼女の努力により、2014年5月以来INMPは非政府組織委員会の推薦にもとづき、ニューヨークの国連の経済社会理事会(ECOSOC)の特別諮問メンバーとしての資格が認められました。

第3回会議 1998年 大阪・京都

1955年に広島平和記念資料館と長崎原爆資料館が設立され、日本は第二次世界大戦後における平和博物館設立の先駆けとなりました。

1998年、大阪と京都で第3回国際平和博物館ネットワーク会議が「平和を展示する：博物館の世界平和への貢献」というテーマの下に開催されました。

この国際会議は初めて現存する平和博物館で開催されたのです。その会場は大阪国際平和センターと立命館大学国際平和ミュー

ジウムでした。

大阪国際平和センター「ピース大阪」は1989年に開館し、国際平和ミュージアムはその3年後に開館しました。

第3回国際平和博物館会議が開催できたのは、当時大阪国際平和センター館長を務めておられた勝部元博士、この会議の開催を主導した立命館大学国際平和ミュージアム館長の安齋育郎教授、そして、会議の運営委員会と立命館大学での事務局を務められた藤岡惇教授の熱意と支援のおかげです。この会議は日本人が多数参加したこと、日本の参加者にも海外からの参加者にも非常に寛大な歓迎のもてなしをされたことが注目を集めました。

海外からの参加者は約80名でしたが、参加者たちは費用の追加徴収なしで、会議の延長ということで広島または長崎への二日間の研修旅行、沖縄への三日間のいずれかに招待されました。国際会議と研修旅行はすべての参加者にとって忘れられない経験になりました。多くの人にとっては、これが日本とその平和博物館への初めての訪問となりました。

第3回会議では、最初に大部の発表論文集が配布され、翌1999年には、同様に印象的なボリュームの報告集が英語版と日本語版で出版されました。この報告集のタイトルは「平和を展示する」でした。

これらの冊子と、この後続く国際平和博物館ネットワーク(INMP)国際会議が発効した同様の出版物は、「平和を展示する」という主題に関する主要な情報源を構成し、このネットワーク形成から得られる永続的な成果となっています。



立命館大学国際平和ミュージアムのサインボード

このネットワークは、結成されてからほとんどの期間、安齋育郎教授、立命館大学国際平和ミュージアム、立命館大学の支援の恩恵を受けてきました。

またこのネットワークの運営については、1992年の国際会議に「草の家」(高知市)を代表して参加し、後に立命館大学国際平和ミュージアム副館長となった山根和代博士の恩恵も受けています。

1998年の国際会議の成果の一つは日本平和博物館ネットワーク(JNMP)の創設でした。この団体は後に「平和のための博物館市民ネットワーク」(JCNMP)と改名されました。同ネットワークは、1999年7月から『ミューズ』というニューズレターを日英両国語版で年間2回発行してきました。INMPのニューズレターは、発行を継続できない時期がありましたが、『ミューズ』は継続して発行されてきました。2017年1月には英語版の34号が発行されています。

『ミューズ』は日本の平和博物館についての最も包括的な情報源となっています。これまでに発行されたすべての号が、こちらの東京大空襲・戦災資料センターのサイトで読めるようになっていました。www.tokyo-sensai.net/muse/

この『ミューズ』の発行については、山根和代氏が編集者・翻訳者として関わってきました。そして安齋育郎氏と山辺昌彦氏がその援助をしてきてきました。山辺氏は、立命館大学国際平和ミュージアムで学芸員として勤務後、東京大空襲・戦災資料センター主任研究員を務め、最近まで『ミューズ』に平和博物館に関する数多くの記事を執筆しました。INMPニューズレターと同様、『ミューズ』の翻訳に関してはボラン

ティアの方々にお世話になりました。とくに谷川佳子氏は立命館大学国際平和ミュージアムで長年ボランティアとして貢献し、国境なき翻訳者団を設立しました。

規模の大きな公立の平和博物館を含むもう一つのネットワークである「日本平和博物館会議」は、すでに1994年に設立されていました。初めは“Japanese Association of Museums for Peace” (JAMP)という英語名称でしたが、後に“Association of Japanese Museums for Peace” (AJMP)と改称され、日本の博物館の協議体であることを明確にしました。

立命館大学国際平和ミュージアムは両方のネットワークと関わりをもつ唯一の博物館です。両方のネットワークに参加していることは、数多くの多様な日本の平和博物館の中でも中心的な位置にあることと、ネットワーク作りにも熱意を持って取り組んでいることを反映しています。そのこと自体、長期にわたって館長を務めた安齋育郎教授の先見の明と熱意の成果と言えます。私たちは、安齋教授の秘書を長く務めておられる島野由利子さんに対しても長年のサポートについて謝意を表したいと思います。また、数年前からINMPニューズレターは日本在住のロバート・コワルチェック教授（元近畿大学教授）が編集に協力されていることも挙げておくべきでしょう。

第4回会議 2003年 フランダース

北ベルギーの西フランダース州の歴史と風景の特徴は、第一次世界大戦のいくつかの大規模な戦闘とその戦闘による莫大な数の死傷者のための何百もの戦没者共同墓地や慰霊碑、記念館があることです。

第4回国際平和博物館ネットワーク会議の

テーマはこの特徴を反映し「戦争回顧から平和教育へ」でしたが、2003年5月にフランダースで開催されました。

この会議は海の近くのリゾート地であるオステンドで開催され、その地域にある二つの主要な博物館である、イン・フランダース・フィールズ博物館（イーペル）とイーゼル・タワー博物館（イーゼルトーレ、ディスクミュード）への研修旅行が含まれていました。



イン・フランダース・フィールズ博物館のロゴ

その国際会議のプログラムには、ブリュッセルのヨーロッパ議会での会議も含まれていました。

二つの世界大戦が20世紀前半にヨーロッパから始まりましたが、この戦争は計り知れない破壊・死・苦しみをもたらしました。このことが主な刺激となって1950年代に本格的に統合された平和なヨーロッパを作り出す試みが始まったのです。そして、この理想を具体的に実現させたのが「ヨーロッパ議会」の創設です。

3世紀前、ヨーロッパの国々が戦争の中で反目し合っていた頃すでに、イギリスのクェーカー教徒であるウィリアム・ペンは『ヨーロッパの現在と将来の平和に向けてのエッセイ』で、将来の戦争を防止するために、まさにそのような組織を創立することを提案していました。

ヨーロッパ議会のフランダース出身の議員との会議において、国際会議の参加者は、「ヨーロッパ平和博物館設立」など3つの

提案をしました。

イン・フランダース・フィールズ博物館は1998年にイーペルの街の中心部にある歴史的に有名な中世の織物取引所を改築して開館しました。この織物取引所は第1次世界大戦で完全に破壊された後に丹精をこらして再建された堂々とした建築物でした。ディスクミュードのイーゼル塔博物館の元々あった塔は1930年に建設され、1946年に犯罪者によって破壊されました。再建された塔は高さ84メートルで、その中に博物館の展示室が24階あります。1965年に開館しました。

国際会議の参加者はイーペル付近の戦跡を巡る研修旅行にも参加しました。その中で、イーペルの名が知られるようになった理由でもある最も重要な戦没者記念碑や戦没者共同墓地のいくつかも訪問しました。その中には、印象深いフラトスロのドイツ軍墓地も含まれていました。そこにはドイツの版画家・彫刻家であるケーテ・コルヴィッツの心を揺さぶる「嘆き悲しむ両親の像」もありました。その彫像は彼女の息子の墓の前に置かれています。彼女の息子も1914年に最初に戦争の犠牲となった多くの人たちの一人でした。



ケーテ・コルヴィッツの彫像

長い戦争（1914年～1918年）の悲惨な破壊は、その地域の風景に消せない傷跡を残し、生き残り苦しみ続けている人々の間に戦争に対する嫌悪感を残しました。

このような土地柄もあり、ここ数十年の間に、西フランダース州は平和地域として自らを定義し、イーペルは平和都市であると公式に発表してきましたが、これは当然のことと言えるでしょう。

第4回国際会議の運営のために、フランダース地方の行政組織と西フランダース州行政組織から多額の支援が寄せられました。

「イーゼルの墓地への巡礼」という慈善団体（イーゼル塔博物館の管理団体）がこの国際会議を主催し、この団体の Lionel Vandenberghe 議長と Dirk Demeurie 事務局長に大変お世話になったことに対し謝意を表したいと思います。そして、イーペルでの研修を受け入れたイン・フランダース・フィールズ博物館の Piet Chielens 館長にも感謝したいと思います。

第5回会議 2005年 ゲルニカ

イーペルと言えば、1915年4月に戦争で初めて毒ガスが使用されたことを連想すると同様、北スペインのバスク地方にあるゲルニカという無防備だった小さな町の名前を聞けば1937年4月の空襲を想起します。

この町はスペイン内戦の時にナチス・ドイツによって空爆されました。

ピカソがこの空襲の残虐さに対する激しい怒りを『ゲルニカ』という絵画に示したことはよく知られています。ピカソは、この無防備だった町に対する戦争犯罪にすぐに直感的に反応し、この絵に表現したのです。

第5回国際平和博物館ネットワーク会議は、「平和のための博物館：追悼・和解・芸術・平和への貢献」というテーマの下に2005年4月～5月に開催されました。この

会議は、1988年にゲルニカ＝ルモの町議会によって設立されたゲルニカ平和博物館財団が主催しました。同博物館では、2003年に新しい常設展示が一般公開されました。

その町議会は、ゲルニカ＝ルモは平和と和解の町であると宣言し、近代的で印象的なゲルニカ平和博物館を支援しているだけでなく、平和に関する素晴らしい調査研究や文書保存を行なっているゲルニカ・ゴゴラトゥス平和研究センターも支援しています。このセンターは和解に活動の焦点を当てていますが、その構想は平和創造の核となります。暴力的な紛争や戦争があったところでは、過去の不和を克服し、将来敵対することを避けるために努力をして、対立していた両者が和解の過程に関わることが必要です。戦跡や、人々が仲間である同じ人間に対して大変な苦しみを与えた場所（強制収容所・拷問部屋・処刑場・牢獄・強制労働収容所管理所など）にある他の多くの博物館のように、ゲルニカ博物館の目的はその街を破壊した悲劇的な出来事を文書に記録し、記念し、以前敵だった人々との和解を促進することです。

国際博物館会議（ICOM）の会員が参加したことや、歴史的記憶に関する博物館のサブグループが会期中にいくつかのパネルを組織したことは、この国際会議の特色の一つでした。

2006年には、3か国語（バスク語・英語・スペイン語）で書かれたかなりの厚さの発表論文集が出版されました。

INMPは、役員の一員であるイラツェ・モモイショ（Iratxe Momoitio）ゲルニカ平和博物館館長とゲルニカ＝ルモの町に対して多大な恩を受けています。



ゲルニカ平和博物館

第5回会議では、平和博物館国際ネットワークの名前と役目について二つの重要な事項が決定されました。

第1には、名称を「平和博物館国際ネットワーク」（INPM）から「平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）」に変更したことです。この変更はいわゆる「平和博物館」だけでなく、美術館や民族博物館などより広い「平和のための博物館」にネットワークを拡大することを意図したものです。

第2には、理事会と諮問委員会が設立され、統括コーディネーターを含む様々な役職を決めるために選挙が実施されたことです。

そして、この選挙で選出されたメンバーによる理事会が、第2回国際会議で任命され、1999年5月の「ハーグ平和アピール」の機会に開催された会議でも設立されていた国際委員会を引き継ぐことになりました。後に、理事会は、2007年10月にローマで開催された会議でハーグ市当局から「ハーグに事務局を設立する」よう招請を受け、これを受諾しました。

それまでネットワークは適当な事務所や事務局を持つことができず、その住所は、ブラッドフォード大学平和研究学部所属の統括コーディネーター（ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士）のアドレスになっていました。1年後の2008年10月1日、INMPの事務局がハーグに正式に開設されましたが、実際に事務局員が任命され、機

能を果たせるようになるまでには、さらに15 か月程かかりました。

第6回会議 2008年京都・広島

2008年10月の会議は、再び日本で開催されました。前回日本で開催されてから10年が経っていました。

今回は京都と広島が開催地で、会議のテーマは「平和を創造する場としての平和博物館：世界的な問題解決のための『平和を理解し発信する能力』の育成」でした。

この国際会議は主に立命館大学国際平和ミュージアムで準備されました。この時も実行委員長・安齋育郎教授の主導の下に準備されましたが、会議は、京都造形芸術大学・東北造形芸術大学・立命館アジア太平洋大学および広島平和記念資料館も共催して開催されました。

広島平和記念資料館では、会議の最終日に当時の広島市長・秋葉忠利氏のスピーチがありました。

第6回会議のための出版物の中には、安齋育郎氏、ジョイス・アプセル氏、サイード・シカンダー・メディ氏によって編集された論文集『平和博物館：過去・現在・未来』や、山根和代氏により編集された最新版のより充実した博物館要覧『世界の平和のための博物館』がありました。『平和博物館：過去・現在・未来』のような論文集が出版されたのはこれが初めてでした。これらの冊子は、第6回会議の実行委員会によって出版されたものです。

これらすべての出版物には、報告集も含めて、このINMPのロゴとして採用されることとなったピンクと青のハート型の蝶のようなロゴ・マークが初めて使用されていま

した。

このロゴは京都造形芸術大学および東北造形芸術大学で募集したロゴ・デザイン・コンテストでグランプリを受賞した斉藤雄介氏（東北造形芸術大学学生）の作品でした。

同氏の厚意によりINMPはこの衝撃的で美しいロゴを自由に使うことが出来ます。ロゴは、協力の必要性や平和の脆弱さ波のように広がる進歩のイメージを象徴しており、“Museums for Peace”の扉やこのニューズレター特別号の51頁にも紹介されています。ロゴについては、長い間INMPの協議事項として何度も取り上げられていましたが、最終的な決定を見ました。実際、ニューズレターの最初の号には、いくつかのロゴ候補が複製されていました。それらは、オーストリアのヴォルフスエックにあるオーストリア初の平和博物館の設立者であり館長であるフランツ・ドイチュ氏から送られたものでした。このロゴはドイチュ氏の友人の芸術家ハンス・シェンク氏によってデザインされたものでした。シェンク氏は気前よくそのロゴを国際平和博物館ネットワークに提供してくださったのでした。もう一つのより落ち着いた感じで様式化されたロゴ・デザインは、レオンハルト・ウェックス氏から提出されたものでした。



第6回国際会議総会

2008年ハーグでINMP本部の設立

1992年ブラッドフォードでの第1回会議において、定款も事務局も予算もないゆるやかなネットワークグループとしてINMPがスタートしてから、組織としての次の重要なステップを踏み出すまで多くの年月を要しました。2008年～2009年、ハーグに事務局を開設するとともに、INMPは法人化されました。この前進は、ハーグ市が“世界平和と正義のための国際都市”としてINMPの事務局を置く機会を与えてくれた結果でした。ここ数十年で、ハーグは、国際社会ととりわけ国際法と正義、人権、平和の分野における政府間及び非政府組織の国際機関を招き入れ、積極的に「獲得」政策を推進してきました。このプロセスを導くために、同市は2008年から3年で15,000ユーロをINMPに援助しました。INMPは補助金を受けて、平和宮に近い近代的な大きなビルに、平和、正義、そして人権に関わる他の20のNGOとともに事務所をもつことができました。2012年に同市は、そのビルをベルタ・フォン・ズットナー (Bertha von Suttner) を記念してその名を冠しました。ベルタ・フォン・ズットナーは第一次世界大戦前の国際的な平和運動のリーダーで、アルフレッド・ノーベルの友人であり、平和運動の蓄積を残すようノーベル氏を説得し、ノーベルは遺言で「ノーベル平和賞」を設立しました。ズットナーは1905年に女性初のノーベル平和賞を受賞しています。ズットナーは、また、1899年と1907年、ハーグでの外交上重要な平和の諸会議において、ロビイストとして影響力を發揮しました。(1913年に開館した「平和宮」の建造物は、それらの会議の成果の一つで

す)

ネットワークの組織化の一部として、新体制の採用、役員の任命、公式な会員制度の導入、ウェブサイトの立ち上げ、ネットワークのパンフレットが作成され、パート事



ハーグのベルタ・フォン・ズットナー・ビル

制の採用、役員の任命、公式な会員制度の導入、ウェブサイトの立ち上げ、ネットワークのパンフレットが作成され、パート事務局担当にニケ・リスカリエット (Nike Liscaljet) が採用されました。初めての事務所設立後、彼女はこれらの仕事の多くに取り組みました。INMPは、彼女の数年に及ぶ効率的な働きと心からの献身に深く感謝しています。新体制に従い、役員会は毎年開かれています。ルチェッタ・サンガイネッティ (Lucetta Sanguinetti) 理事の招待で、第1回委員会がローマで開催されたことに続き、翌2008年の第2回目の役員会は、ジュネーブ赤十字・赤新月博物館の館長でINMP理事だったロジャー・メイヨー (Roger Mayou) の招待により、INMPの団体会員である国際赤十字博物館で開催されました。その後は、ハーグ事務局または3年毎のINMP会議の場で役員会が開かれています。2016年初頭、スカイプによる役員会に多くの役員が参加し、アフリカ、アジア、ヨーロッパ、アメリ

カの役員は旅費負担を免れました。役員会は、役員選挙（理事会、諮問委員会、統括コーディネーター、秘書、会計、ウェブマスター）や3年毎のINMP会議候補地の申請と選考等の手続きを進めました。役員は常に無報酬の名誉職として選出されています。これは、使命感をもつ人びとによって設立される平和関連のNGOでは珍しいことではなく、（金銭的な犠牲を伴うことも多い）ボランティア精神やエネルギーにより支えられてきました。



ハーグ事務局での役員会

2010年～2014年の約5年間は、アルバイトやパートという形ながらINMPの収入で事務局員を雇うことができました。ハーグ市からの最初の3年間の助成金に加えて、発足時にイギリスの2つの団体“Give Peace a Chance Trust”と“Allan & Nesta Ferguson Charitable Trust”からの寄付が追加の収入をもたらしました。2009年～2013年には、役員のアサヒ教授が、毎年10,000ユーロという最も寛大な個人寄付をしました。また、彼の努力を通じて、2011年～2016年、安西メディカル株式会社が毎年50万円を寄付しました。INMPは、安西メディカル株式会社の安江直人社長の協力に感謝します。その他の大きな個人寄付は、山根和代氏と、デイトン国際平和博物館館長

(2005年～2009年)でオハイオ市の平和美術ギャラリー(後のMissing Peace Art Spare)のスティーブ・フライバーグ(Steve Fryburg)氏によるものです。説得力に富む平和博物館の提唱者で、INMP支援の柱でもあるスティーブ・フライバーグ氏は、組織の設立後の最初の5年間、ウェブマスターや会計も担当しました。彼は、彼の時間や専門知識で惜しみなく組織に貢献しただけでなく、財政的にもさまざまな形でINMPを支え、それは今日まで続いています。彼の例はデイトン国際平和博物館理事会のロニー・フランク(Lonnie Franks)氏にも引き継がれています。INMPは、彼の最近の寄付に対してだけでなく、INMPの会計としても力を貸してくれることに大いに感謝しています。これらの個人や企業の寄付以外、通常予算の唯一の収入は会費から得られています。ハーグに事務局を開設したことは、INMPの組織化に貢献しているだけでなく、さまざまなプロジェクトの開始でINMP拡大のための多くの機会も与えてくれました。後に説明するように、多くのプロジェクトは、しばしば国内外の支援者との協力、多様なスポンサー組織や慈善団体からの財政援助もありました。

2011年第7回会議、バルセロナ

2011年5月バルセロナで開かれた第7回INMP会議の会場は、1995年の第2回会議の時と同様、素晴らしい堂々たる城でした。シュタットシュライニングの城は、森に囲まれた小さな村を見下ろす姿でしたが、ムンジュイック城は、スペインの第二の都市でカタルーニャの首都である広大な都市を見下ろしています。



ムンジュイック城の入口

会議を主催する申し出は、城の主たる利用者であるバルセロナ国際平和資料センター (BIPRC) のジョルディ・カプデビラ (Jordi Capdevila) 館長からありました。城は1960年まで軍の刑務所として使用され、それ以前の二世紀に渡るたくさんの暴力行為を目撃してきました。1963年、城は軍事博物館となり、2007年スペイン軍がバルセロナ市議会に城の管理と運営を譲渡した折、城に平和センターを設立することが決定されました。平和構築や危機管理、人道的分野の専門家にトレーニングコースを提供したり、展覧会を含む多様なイベントの企画をしたりと、平和の文化を促進するために、2009年に平和センターが設立されました。このことは、閉鎖された軍事博物館が平和博物館に変わり得るということを想像させました。これらの発展は、会議のテーマ「暴力と戦争の文化から、非暴力と平和の文化への転換における博物館の役割」を決める際にも影響を与えました。第7回会議の特筆すべき点は、たくさんの地元や地方の平和団体がラウンドテーブルについたことでした。会議でなされた発表の多くは、クライブ・バレット (Clive Barrett) とジョイス・アプセル (Joyce Apsel) の編集で『平和のための博物館：文化の転換』として翌年 INMP から出版されました。

2014年第8回会議、韓国ノグンリ

バルセロナでの会議中、次回2014年に開催される候補地選びについて何人かの INMP 関係者が関心を示していました。候補地決定においては、公正かつ意思決定の透明性を可能にするような申請と選出過程の必要性が提案されました。選ばれた候補地は、韓国のノグンリ平和財団でした。

1950年7月の朝鮮戦争初期、ノグンリの村の何百人もの罪もない市民が、アメリカ空軍による爆撃やアメリカ軍部隊のマシンガンと銃により殺害されました。50年後、真相究明とアメリカに謝罪を求めた生存者による運動が成功をおさめました。韓国政府の支援で、平和博物館、記念タワー、訪問者センター、彫刻のある広場、教育棟他、さまざまな施設を備えたノグンリ平和公園が造られました。



ノグンリ平和公園

ノグンリ平和財団の活動は、館長のチャン・クドー博士 (Dr. Chung Koo-do) によってバルセロナの INMP 会議で報告されましたが。同館長は、次回会議の候補地としても名乗りを上げました。2014年9月、韓国政府と地方政府の財政的な支援を受けノグンリ平和公園で開催された会議には、35カ国が

ら参加がありました。主催財団の主たる関心は、「戦争を防ぎ、和解・歴史的事実・記憶（追悼）を促進させるための平和博物館の役割」というテーマに反映されました。会議の始めには、チャン・クドー館長とキム・ヘヨン氏（Ms. Hyeyeon Kim）が編集した会議論文集が参加者に配られました。同年後半、450 ページに及ぶ『ベスト論文集』が、INMP 役員ロイ・タマシロと山根和代氏の編集で財団から発行されました。会議の最終日、参加者は DMZ（非武装地帯）の中のイムジンガク（臨津閣）へ行き、財団により平和宣言が読み上げられました。2013 年 12 月、INMP はノグンリ平和財団の第 6 回平和賞（人権部門）を受賞したことを大変誇りに思っています。これは、クライブ・バレット INMP 役員が、INMP は人権と平和の文化の創造に寄与したことを推薦した結果です。安齋育郎教授は、その 2 年前に第 4 回平和賞を受賞しました。



第 8 回ノグンリ会議の参加者

2017 年第 9 回会議、ベルファスト

INMP は世界的な拡大と会員獲得を目指しているため、3 年毎の会議を世界の異なる地域で開催したいと考えています。世界各地での開催により、主催する平和博物館が注目され、現地やその大陸からの参加者を呼

び寄せます。これまで、会議はヨーロッパやアジアのみで開催されており、アフリカやアメリカから主催したいという申し込みがないため、今のところ開かれていません。前回の会議がアジアで開催されたことを受けて、2017 年の会議は、開催申請のあったヨーロッパで開かれることになりました。

Visit Belfast と Bespoke Northern Ireland が、会議会場となるアルスター大学の支援を受けて、北アイルランドのベルファストでの開催を申請しました。これは、主催者が INMP 会員や平和博物館、平和センターではない初めての会議でした。INMP 会議プログラム委員会は、地元の主催者提案のテーマ「生きた平和博物館としての都市」を受け入れました。他の主題がある中で、分断や問題を抱えた都市から紛争後の癒しと和解を通して平和意識のモデルとなる街への、ベルファストの社会的で政治的な変化に、ハイライトをあてています。INMP は、デボラ・スウェイン（Deborah Swain）とメリタ・ウィリアムズ（Melita Williams）の共同申請とその後の多くの作業に特別の謝意を捧げます。また、地元の運営委員会と、ベルファスト会議の運営委員長としてプログラムの様々な側面の円滑で効果的な運営を確実にしてくれたロイ・タマシロ教授（Roy Tamashiro）にも感謝します。

第 9 回会議の特筆すべき点は、国会議事堂での開会式、北アイルランド議会、また市役所での閉会式です。2017 年 4 月の会議は、INMP の設立 25 周年の祝賀の機会でもあります。ブラッドフォード（第 1 回会議の開催地）とベルファストの距離的な近さは、本会議の前にブラッドフォードの平和博物館が 1 日プログラムを主催する上でも役に立ちました。



アルスター大学の芸術的な建物

INMP 会議は、全体会と分科会、論文発表、ポスター展示、パネルとワークショップを主としています。しかし実際には、すべての国際会議が文化的な場面や（音楽も）、興味深い地元への小旅行等も含んできました。小旅行は、アイゼンシュタットのエステルハージ宮殿（オーストリアのヨーゼフ・ハイドンが法廷作曲家だった）、ビルバオ・グッゲンハイム美術館、カタルーニャ州フィゲラスのサルバドル・ダリ美術館、大阪城、ベルギー海岸のボート旅行や他の多くの地への訪問も含んでいます。これらの機会は一しばしば忘れられない機会として、時には（安齋教授の）魔法のように一世界中の参加者の友情の絆を育んでくれました。

ハーグの INMP スタッフの活動

ハーグに事務局が開設されて以来、INMP はその都市における情報の活発な担い手になってきました。INMP は、ニケ・リスカリエットさん(Nike Liscaljet)、ペトラ・ケプラーさん(Petra Keppler)、そして INMP 顧問のマーテン・ヴァン・ハーテンさんの協力を得ました。1 世紀以上の間、ハーグは多くの平和会議や催しの開催地になってきました。公式なものだけでなく、いわゆる「市民社会」

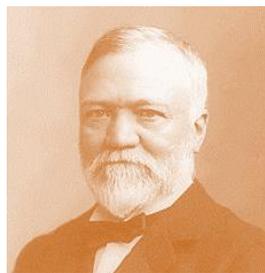
によるものもあります。近年(2014ー2018)は、第1次世界大戦から 100 年ということで、幾つかのプロジェクトを展開してきました。平和構築の歴史、平和教育、平和の文化に焦点を当てていますが、ここから得られた教材は、平和教育や平和ミュージアムに有効利用できるものです。「平和都市」で平和の可視化を高めようとしてきたのです。

スタッフは長年の課題、ハーグに平和ミュージアムを創る計画にも関わっています。世界平和と正義希求の最適地の一つとされてきたハーグを、進化させるのです。平和ミュージアムによって、都市での「平和ツアー」も発展するでしょう。文化遺産、平和、調停、正義を基とする社会秩序に卓越した役割を担っているハーグが、平和ミュージアムの理想の場であることには疑いの余地がありません。限られた人員と資金ではありますが、INMP はこの計画のために、努力を続けていきます。

第1次大戦 100 周年記念のための、INMP スタッフのハーグでの主な 5 つの活動は (1)平和宮の歩み(2013)、(2)国際婦人会議(2015)、(3)ハーグの銀行家 J.G.D.ウオテラー(Wateler)さんの遺言(2016)、(4)ハーグを含むヨーロッパの 7 都市のピースウォーク、そして(5)イヴァン・ブロッホ(Jan Bloch)をハーグ内外に知ってもらうことです。ブロッホさんは第 1 回ハーグ平和会議(1899)の生みの親で、平和研究や平和ミュージアムの先駆者な人物です。

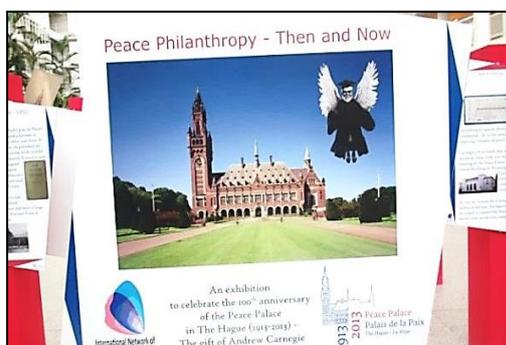
2013 年 8~9 月に、国際平和と正義の象徴である平和宮で、創立 100 周年記念を祝いました。平和宮はスコットランド系アメリカ人で実業家のアンドルー・カーネギー(Andrew Carnegie)さんから多額の寄付を得て建てられました。1913 年に開館し、1946 年からは国連の国際司法裁判所が置か

れ、ニューヨーク以外で唯一の主要な国際機関です。



アンドルー・カーネギー (1835-1919)

INMP は、平和宮とオランダのカーネギー基金の協力を得て「ピース・フィランソロピー (平和の社会貢献活動) と平和教育の発展 - アンドルー・カーネギーの足跡をたどって」と題して、2 日間にわたり国際シンポジウムを催しました。同時に、「ピース・フィランソロピーの昨今」という展示を、シティーホールの大広間で初めて行ないました。これは、ベルリン、ブラッドフォード、コヴェントリー、そしてハーグのベルタ・フォン・ズットナー・ビルでされてきたものです。



「ピース・フィランソロピーの昨今」

シンポジウムでは基金の示唆を受けて、慈善目的の宝くじの維持とフィランソロピー風土の強化を、オランダ政府へアピールしました。また、ナイト・ホール(Knights' Hall)では、平和宮フィランソロピー祭(2013.9.2)を支援しました。そこで「戦争の子(war child)」と「戦争と平和の記録機関(the Institute for War and Peace Reporting)」

の2つの団体のために寄付を集めました。また、平和宮 100 年とシンポジウムを記念して『記念の美: 世界の平和記念物とミュージアム』(2013)というユニークな本を刊行しました。講演者で INMP の会員でもある著者、エドワード・W・ロリス(Edward W. Lollis)さんは、平和記念物とミュージアムの世界最大のサイトを管理しています。33 のカテゴリーに分類された、500 以上の平和ミュージアムについて、このサイトで見るすることができます。

www.peace.maripo.com/p_museums_by_type.htm

シンポジウムと展示が可能になったのは、日本の小松電気産業株式会社の小松昭夫氏からの 30,000 ユーロの寄付の賜物です。小松氏も平和フィランソロピストとして、展示されました。彼は日本に設立した人間自然科学研究所(HNS)の働きについて、安齋育郎教授の誘いを受けてハーグの INMP 会議で発表しました。HNS はアジア太平洋地域、とくに中国、韓国と日本の平和と和解を進めています。彼は 2008 年、京都や広島で催された第 6 回国際平和博物館会議にも貢献しました。

コーラ・ワイス(Cora Weiss)さんや、ニューヨークのサミュエル・ルビン(Samuel Rubin)基金からも援助がありました。

2015 年 4 月、ハーグでの国際婦人平和自由連盟(WILPF)の 100 周年記念で、INMP は「1915 年の鮮明な記憶」と題した円卓会議を催しました。会議では女性、平和、人権に関する映画を上映したが、それはマーテン・ファン・ハーテンさんが、世界女性会議(1905 年)についての映画を発見したことがきっかけでした。第 1 次世界大戦中の女性の平和構築への関わりを示し、2000 年の女

性、平和、安全についての国連安保理決議1325の先駆けとなったものです。

サミュエル・ロビン基金、女性の平和運動や映画史研究者、アメリカ議会図書館の協力も頂きました。ウィルバー・H.ダーボラフさん(Wilbur H. Durborough)のルポルタージュ「最前線のドイツ軍と共に」の修復に、図書館が力を貸してくれたのです。

またINMPは、ハーグの化学兵器禁止機関(OPCW)の本部において、「1920～30年代のWILPF化学兵器反対キャンペーン」と題した展示をしました。



平和活動の女性先駆者を称えて

ペトラ・ケプラーさんは、平和活動の女性先駆者を称えて、INMPの「アレッタ・ジェイコブスたち、1915年の勇気ある女性」と題し、平和宮でのアレッタさんの胸像披露に合わせた企画を、平和宮の門で行ないました。アレッタさんは、ジェーン・アダムズ(Jane Addams)さんと共に、ハーグでの1915年国際女性会議に関わり、女性参政権のリーダーだった人です。この企画には国際女性連盟やオランダのWILPFなど、女性グループの協力がありました。

ハーグの銀行家、J.G.D.ワテラー(Wateler) (1857-1927)さんの遺言に関するプログラムが、2016年11月に平和宮で催されました。第1次世界大戦中、彼は遺言

を作成し、戦争廃止へ向けての平和賞創設のために財産を残したのです。賞の最初の授与は1931年で、ノーベル平和賞に次いで古い賞です。遺産はカーネギー基金により管理され、当初から平和宮で授賞式が行われてきました。INMPの勧めで、ワテラーさんの初めての伝記がマーテン・ハーテンさんによって書かれ、挿絵も豊かな本『カーネギー ワテラー平和賞』が出されました。英語版は現在準備中です。先行して、カーネギー基金とエラスムス・センターによる「平和フィランソロピーを学ぶ会」が催されました。その間、INMPの「ピース・フィランソロピーの昨今」も展示しました。

2012～2015年、INMPのスタッフは、国際プロジェクトの始動と実現に取り組んできました。ハーグはヨーロッパの6都市—ベルリン、ブダペスト、マンチェスター、パリ、トリノ、ウィーンと共に「平和の道」を創りました。それぞれの都市で、過去や現在の平和、正義、人権に取り組んだ15の場を見つけて光を当てることを目指しました。第1次世界大戦から100年記念の焦点が、戦争碑、戦場の兵士や行為に当てられることが多い中、ヨーロッパ都市の平和活動家や平和構築活動の文化遺産や存在に目を向けました。「ヨーロッパの平和発見」プロジェクトは、平和や非暴力文化発展の重要な要素としての「平和ツアー」の前進に貢献しました。戦場などの、いわゆるダーク・ツーリズムに代わるものを提供しました。このプロジェクトはヨーロッパ会議(グルニトヴィ基金の生涯教育プログラム)から約250,000ユーロの支援を得ています。

このサイトから「平和の道」を見ることができます。

www.discoverpeace.eu/choose-a-city/



ヨーロッパの平和発見

プログラムは2014年3月21日に、7都市同時にスタートしました。ハーグでは、平和宮のビジターズ・センターの外に「平和を願う木」を植えることから始まりました。INMPの提案で、カーネギー基金の支援を得て植えられたこの木はとても評判になりました。地域的にも国際的にも、平和活動家や教育者を元気づけたのです。

ハーグは「国際平和・正義の中心都市」として今日卓越していますが、前例のない平和会議を1899年に催したことから始まりました。そこで、常設仲裁裁判所や裁判所の場になる平和宮ができました。ロシア皇帝のニコラスII世は軍事競争を止め、将来の大戦を防ぐために会議を要請しました。彼は研究を通して、イヴァン・ブロッホに影響を受けましたが、ブロッホは「鉄道王」と呼ばれ、ベルタ・フォン・ズットナーとともに、ハーグの外交会議の目立ったロビイストで、国際平和運動の象徴でもある人です。

しかしブロッホは、ハーグでも彼の祖国ポーランドでも忘れられつつあります。2015年6月、ポーランド大使館はINMPスタッフの提案を受けて、ブロッホの英語で初の伝記を出版しました。世界の多くが、第1次世界大戦100年記念のイベントを実施している中で、イヴァン・ブロッホを記憶す

ることは正当で時宜を得たことです。彼は戦争に警告を発して1902年、スイスのルツェルンに戦争と平和のミュージアムを作った人なのです。INMPは引き続いて、ポーランド大使館や平和宮、ワルシャワにあるイヴァン・ブロッホ基金、ポーランド・ユダヤ人歴史博物館とも協力します。単にブロッホを記憶しようとするだけではなく、平和ミュージアムを通して、戦争を防ぎ、平和を促進した彼の先駆的努力を継続していきたいのです。



2ユーロ硬貨のズットナー

以上のような活動や催しに加えて、INMPのスタッフはベルタ・フォン・ズットナー・ビルの中にある「若い平和活動家のネットワーク」(UNOY)など、他のNGOとも協力を進めています。2012~13年にかけては、彼らと共に、平和に関する写真の移動展示をしました。また、2014年6月の「ベルタ・フォン・ズットナー ウィーク」の期間、没後100年、彼女の有名な小説『武器を捨てよ』の出版125年を記念する催しに協力しました。「ベルタ・フォン・ズットナーの足跡をたどって」というウォーキングツアーや、ヒューマニティ・ハウスでの上映会も行ないました。小説の内容を描いた1914年のデンマークの映画で、初の反戦映画と見なされているものです。10月には、2日にわたって「戦争の非合法化に関するハーグ円卓会議」を催しました。それは、カナダの平和女性機関(VOW : Canadian Voice of

Women for Peace)により成され、多くの NGO 代表者や、国際弁護士、学者が参加しました。INMP のスタッフは 11 月、化学兵器禁止機関(OPCW)に招待され、協力してメッセージを人々に広報する方策を話し合いました。会議は、OPCW と INMP メンバーであるシャリア・カテリ (Shahriar Khateri) 博士によって進められました。博士はテヘラン平和ミュージアムやイランの NGO、化学兵器被害者の会(SCWVS)の創立者の一人です。



国連平和の日の公式ロゴ

INMP のペトラ・ケプラーさんは、国際平和の日 (9 月 21 日)頃に、ハーグで行なわれる年次のピース・ウィークに関わっています。2017 年 1 月には、ブラッドフォード大学の 50 人の学生と 3 人の教授の、ハーグ平和ツアーを支援しました。これはベルタ・フォン・ズットナーを通しての平和教育の始まりで、INMP 事務所もあるズットナー・ビルに、多くの学生を惹きつけました。ケプラーさんは、実習生のマイク・ボール(Meike Ball)さん、司書のエリザベス・ノムクジク (Elisabeth Naumczyk)さん、そしてウィーン平和ミュージアム、平和の窓プロジェクトの創始者でのリスカ・プロジェクト (Liska Blodgett)さんに励まされました。そして、子ども達との協力、ピース・ウォーク、講義などを進め、平和教育の場としての INMP の機能を進めています。ジェーン・プ

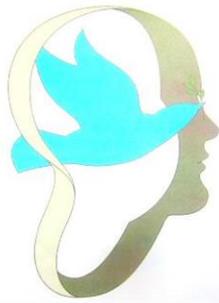
ルフォード(Jane Pulford)さん、橋本典子さんには献身的なボランティアを、ジョス・ヴァーフエフ (Jos Berhoeff)さんには INMP の HP 管理、会員情報、フェイスブック、INMP の記録のデジタル化を担ってもらっています。2016 年にサムエル・ルビン基金から補助金を得て、特に 25 周年のためにデジタル化を進めています。INMP のニューズレターは、すべて英語で見ることができます。日本語の翻訳(2014 年 11 月、No.9～)もこのサイトで読むことができます。

www.museumsforpeace.org/news/newsletters.html

INMP ニューズレターは、私・ピーター・ヴァン・デン・デュンゲンが、安齋育郎、ロバート・コワルチュック (Robert Kowalczyk)、山根和代の各氏の協力を得て、年 4 回の発行を続けています。

INMP の友人：故人と平和博物館

INMP の 25 年の歴史を語る時、国際ネットワークや平和博物館の初期の支持者で故人を思い出さなければ、完全とは言えないでしょう。その中には平和博物館の創始者で館長、そしてしばしば財政的支援をした方も含まれています。彼らは平和や平和教育への情熱を持ち、未来の戦争を防ぐ決意をし、平和博物館の実現のために個人的な犠牲を払いながら、スイスのルサーンに初めて平和博物館を 1902 年に創設したイヴァン・ブロッホや、第一次世界大戦後 1925 年ベルリンに初めて反戦博物館を創設したエルンスト・フリードリッヒの足跡をたどりました。



平和博物館のロゴ
ハンス・シェンク氏のデザイン

彼らは次のような人々です。

フランツ・ドイチュ(Franz Deutsch): オーストリアのウルフゼックで最初に平和博物館を創設、トーマス・ベックス(Thomas Wechs): 最初にドイツのリンダウで平和博物館を創設して館長になり、その後ヒンデラングで平和歴史博物館を創設、クラウス・ラウテルベルク(Klaus Rauterberg): ドイツのジーヴァスハウゼン(Sievershausen)に反戦の家平和センターを創設、ハンス・ヴィーベンガ: アムステルダムに反戦博物館創設プロジェクトを立ち上げ、これは後にオランダ平和・非暴力博物館となる。ジェームズ・ブリストア(James Bristah): アメリカのデトロイトに「刀を鋤に: 平和センター&ギャラリー」を創設、勝部元: 大阪国際平和センターの元館長、西森茂夫: 高知市の平和資料館「草の家」の創設者・元館長、丸木位里・俊: 埼玉県原爆の図丸木美術館創設者です。ほとんどの人は第二次世界大戦で苦難に直面した国で育ったことに注目することができます。彼らは戦争中育ったためにしばしば個人的に戦争の影響を受け、戦争に強い嫌悪感を抱くようになり、将来の戦争を防ぎ教育を通して平和を推進することに生涯取り組む決意をしたのです。多くの人は自分の経験、未来像、情熱を国際ネットワークの人々と共有し、ネットワークを豊



イヴァン・ブロッホ

かに強くするような友情と連帯の絆を創り出しました。INMP ではブラッドフォードの平和博物館の代表で資金を供給したエルノラ・ファーガソンを懐かしく思い出します。私たちはまた第一回平和博物館国際会議の際「平和にチャンス」という団体の代表であったアレン・ジャクソンも思い出します。また第一回平和博物館国際会議の報告をした冊子のカバーを参加者の絵で飾った芸術家で平和活動家のマーガレット・グラヴァーも思い出します。私たちはまた平和教育の先駆者で平和博物館支持者であったアケ・ブジェルステッド教授にも敬意を表します。2016年12月に亡くなるまでネットワークの積極的なメンバーであった坪井主税氏も思い出します。彼は研究や翻訳、出版によって、イヴァン・ブロッホやエルンスト・フリードリッヒによって創設された平和博物館を日本で紹介し、海外の人々に日本の平和博物館について知らせました。これらの同僚や友人たちは、それぞれの方法で平和博物館の世界的ネットワークの発展に大いに貢献されました。

結論

INMP は過去 25 年間、学芸員や博物館専門家、平和教育者、ピースメーカー、平和活動家、芸術家、歴史家などが共通した関心事や問題に取り組むための討論の場を提供して

きました。これらの問題はしばしば紛争や戦争、人権侵害の記憶と博物館での展示に関するものでした。真実を津会えながら、同時に平和のメッセージを伝え、和解と癒しを進めるものでした。このような平和博物館は、伝統的な戦争・軍事博物館と共通するものはほとんどありません。戦争博物館では、戦争と暴力のための道具や身のまわり品を展示し、戦争を賛美したり自国の英雄主義を祝福したりすることがあるからです。平和のための博物館の範疇には、平和・反戦運動の活動や成果を記録し、祝福する活動に取り組む平和博物館や反戦博物館があります。後者はしばしば通常の語りや歴史の本で無視され、重視されることもありません。それが無知によるものか悪意によるもの

のかは分かりませんが、平和運動は無益で愛国心がないものと見なされています。このような博物館では、しばしば平和運動や出来事をより正確でバランスのとれたものにしようとする以上のことをしようとしています。平和博物館では、訪問者が平和の文化と非暴力を推進する努力を積極的にするように、激励したり動機づけたりしようとしています。これはまた原爆による全面的な破壊の記憶を継承している広島平和記念資料館と長崎原爆資料館の目的でもあります。

それらの博物館は全人類に戦争から教訓を学び、平和への道を学ぶよう警告をする役割を果たしています。平和がなければ冷酷な未来しかないからです。

「平和のための博物館国際ネットワーク」への 皆様のご参加をお待ちします

INMPの主要な目的のひとつは、加入した博物館同士の協力を促進し、新しい平和博物館を創るよう刺激を与えることです。INMPには世界各地の博物館が加入しています。その多様性、展示、使命、起源は、今日社会や地球村が直面している幅広い諸問題や課題を思わせます。平和のための博物館とINMPは、平和的な世界を築くのに効果的に貢献する目標を共有しています。

平和のための博物館(INMP)は、平和博物館、平和記念碑、平和の庭、その他平和に関連する場所、センター、団体の国際的なネットワークです。そこでは、平和のための博物館の活動を強化して平和の文化を国際的に作るという共通の願いを持っています。このネットワークは1992年に作られ、2014年に国連経済社会理事会の特別諮問機関とされました。

INMPの目的は、平和のための博物館の活動を促進することによって、世界平和に貢献することです。

ネットワークでは次のことをして目的を達しようとしています。

- 世界中の兵ウェア博物館、平和関連団体、個人を結びつける。
- 国際会議や他の活動を組織する。
- 本、論文、通信など出版活動をする。
- 情報、資料、展示物の交流を促進する。
- 共に展示をして実知的知識を広める。
- 世界各地で平和博物館の想像を促す。

INMPでは目標を達成するために、年会費、寄付、活動を通じた収益金、財政的支援を求めています。あなたの参加を心より歓迎します。

◆連絡先：secretariat@museumsforpeace.org

INMP25 周年に寄せるメッセージ

親愛なる姉さん、誕生日おめでとう

David Adams

デイヴィッド・アダムス
CPNN コーディネーター



ここ平和文化ニュースネットワーク
(www.cpnnc-world.org)では、INMPの
25周年を

祝う機会を得て喜んでいきます！ CPNN
は1998年に始まったので、19歳のINMP
の妹になります。

私たちは平和の未来のために活動していま
すが、大きな家族ではありません。しかし、
マーガレット・ミードの著名な言葉にある
ように、「思慮深い、関わる市民が世界を変
えることは疑いの余地がない、確かにかつ
てそうであった唯一の事です」。

INMPの誕生に喜んでいきます。戦争の文
化から平和の文化へ移行しなければならない
ことを世界がもっともって認識するよう
今後ともに活動できることを楽しみにし
ています。



INMP25周年おめでとうございます

元広島市長
秋葉忠利



平和のための博物館国際ネットワーク（I
NMP）25周年おめでとうございます。
イスラム国、イギリスのEU離脱、トランプ
大統領という時代の現実の中で、世界中の
平和博物館の役割はかつてなく大きくなっ
ています。

各国に、「戦争」博物館—しばしば政府の管
理下で、国家の枠組みを超えられない博物
館—が現存する一方、平和博物館は、人権と
人々の大切な日常生活に基づく平和の普遍
的価値を広めています。平和博物館は違い
や争いを鎮める唯一の方法として「力の支
配」を促進するものではありません。むしろ、
その目的は、市、市民と市民社会組織の多様
性と寛容さに依拠して人類が築いてきた着
実な前進にこそ焦点を当てています。INMP
は世界が歴史の教訓から学び、暴力のない
平和な未来を創るという役割を代表し、活
動の多様性を調整する傘下の団体として機
能しています。

世界の大多数は、INMPが核兵器や戦争の
ない平和な世界を創る主導的役割を果たし
続け、その目的に向かって活動することを
期待していることを付言させて下さい。

INMP の 25 周年にあたって

ジョイス・アスペル
UN NGO/DPI 代表
I NMP 理事



京都と大阪の INMP の会議（1998）の初参加以来、平和を献身的に創造する人々の重要なつながりの理解が深まり、また私の生活も INMP のネットワークと協力的な個人やイベントを通して充実してきました。25 年をお祝いし、地域や世界に平和文化を構築する重要な仕事を未来の世代に手渡せるよう続けていきたいと思えます。

INMP 25 周年へのメッセージ

コリン・アーチャー
国際平和ビューロー
元事務局長
ジュネーブ



親愛なる同志へ

25 周年おめでとうございます！平和教育、平和の歴史、さらに平和の文化や非暴力のための運動を発展させる世界的な努力の中で、博物館は中心的役割を果たします。ゆえに、INMP は最も重要です。情報を共有したり、巡回展示のようなプロジェクトの調整を行ったりするだけでなく、INMP はもっと重要なことに役立っています。すなわち、すべてのメンバーや協力者たちを鼓舞し、その方法を提供することです。時に私たちの考えに違和感や敵意さえも抱くような社会にあって、私たちの孤立感を減らしてくれます。それは生きた役割です。元気づけてください：大きく考え、夢や活

動や計画を続けられるように。進展は可能です！

人類の経験の交流 INMP に祝福を！

アーサー・アイフィンガー
JUDICAP



国際法と平和研究の出版や講演
に取り組む

自己保存と自己創造による自己実現は、人間を最も深い所で衝き動かし、動機づけます。

互いに競い合うことは自然なことです。したがって、自己を抑制、制御することは最も大切な任務でもあり、すべての社会生活への必須条件でもあります。

この任務あるいは“自然の要請”は、私的にも公的にも有効です。それはいかなる時や場所でも普遍性がありますし、環境の付随的な出来事と関係なく、世界中、人類の歴史を通じて存在しています。それでもなお、どのように個と全体の調和をとるかという問題を解かねばなりません。この問題は、メキシコや中東の先住民族にとって課題であったのと同じように、現代の私たちにとっても課題です。残念ながら、この課題は時代を通してずっと深刻になり続けてきました。地球村のいがみ合いは、自己の制御や抑制の道徳的重要性を劇的に増大させています。

私たちが、平和の探求とともに、個と全体、個人の主張と人類全体のニーズをどう調和させるかという課題を認識することは全く正当なことです。私たちが自らを欺くことなく、私たち自身がその課題解決への鍵であることを認識する限り。

私たちは、理想として高い課題を掲げるこ

とが出来ますが、その課題を、所詮は私たちの
の埒外のことだとか、私たちにはどうし
ようもないユートピアだとか考えるのは全く
別の問題です。そうした考えが知的不能に
よるものにせよ、道徳的墮落あるいは利己
主義によるものにせよ、それは単なる論理
上の誤りではなく、人間の内面を反映し、人
間性を形成するもの自体を裏切ることに
も等しいものです。結局、果たされていない私
たちの高い課題に立ち返ることになります。
歴史は鏡を提供します。平和の歴史は私
たちの良心を評価するようなものです。それ
は、相対立する心の衝動を調和する終わ
りのない旅路に横たわる厄介なディレンマ
不安定な調和を追い求める、あのじれっ
たい旅路—にメスを入れます。歴史は全時代、
全人類の物語であり、私たちすべてに影
響を与え、訴えかけます。したがって、最
も推奨すべき、そして価値あることは、平
和教育者が団結して共同の努力を表し、ネ
ットワークを育み、すべての人に「これは
あなた自身の物語なのですよ (de te fabula
narrator)」ということを教えることによ
う。

世界的な人類の経験の交流ほど、私
たちのメッセージをさらに強めることは
ありませんし、私たちの努力をさらに
効果的にすることもありません。私
たちが、「私たちの共通の遺産」を
提供し、サイトとサイト、ブログ
とブログ、言葉とイメージ、出版
物とプレゼンなど、あらゆる近代
的なコミュニケーション方法を利用
するとき、私たちのメッセージの
正当性がおのずと現れるでしょう。



INMP 25 周年をお祝いして

ティモティー・ガチャンガ
コーディネーター
地域平和博物館財団
ケニヤ



今日、
地域や集団で
時には社会の中の敵どうし
でも語らねばならない
暴力的な過去のさまざまな物語を
描き、伝え、それに向き合ってきた、
25 年間の勇気と犠牲を
記念して集う

今日
ピーター、ニケそして他の人々の
勇気と犠牲を
記念して集う
私たちの社会を飲み込むような
紛争と不調和の物語から
和解と協力の物語を織りなすために

私たちに思い起こさせてくれる
暴力の過去について、そして
異なる社会のアイデンティティーについて
沈黙を守る文化は
互いに争い合ってきた社会の
アイデンティティーを
増強することだけに役立つことを
あなた方は私たちに勇気づけてくれる
寛容を美德として認めることも
そして、限界を探究することも。
非難とそれに対する非難の
無限のサイクルを壊す
それが唯一の方法だから

やったぞ、ピーター！
INMP 万歳！

INMP 25 周年を祝う

ヨハン・ガルトング
TRANSCEND 創設者



もう 25 周年。おめでとう！時は流れ、なおいくつか戦火を交えている国々があるものの、世界は全体としては平和に向かっていきます。そして国際平和ミュージアムは希望の光の施設として際立っています。

「和のための博物館国際ネットワーク
創立 25 周年」おめでとうございます

日本原水爆被害者団体協議会
(日本被団協)



INMP 創立 25 周年にあたり、21 世紀の世界の平和維持に貢献された貴ネットの活動に対し、原水爆被害者団体協議会からのお祝いを申し上げます。

戦争と紛争を地球上からなくすために、愚かにも人類が繰り返してきた戦争の実態を学び知ることが重要です。世界各地の平和のための博物館がたゆまなく情報を交換し、指導的な提案をされる重要性はますますたかまっています。

第 9 回総会がアイルランドのベルファストで開催され、創立 25 周年を迎えますことは大変喜ばしいことです。

国内の関連博物館がネットワークに参加しておりますが、とりわけ、原爆被害者の運動を継承していく日本被団協の姉妹組織で将来

は博物館的性格も持つように発展することが期待される「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」も参加しています。情報と経験を共有させていただくことを心強く思っています。

貴ネットワークのますますの発展を期待し、お祝いのメッセージとします。

25 年で成されたこと 平和にチャンスを与えてくれた組織

アナトリー・I・イオネソフ
創設者、国際フレンドシップクラブ
‘エスペラント’



& 平和と連帯国際博物館、
サマルカンド、ウズベキスタン
ウラジミール・I・イオネソフ校長
文化先進研究国際学校
マル国立文化研究所、ロシア連邦



平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）は 25 周年を迎えました。それは単に記念日ではなく、暴力のない世界のための絶え間ない創造的活動の四半世紀でした。この国際的な組織の活動を通じて、様々な平和を創る活動の力強い組織が作られてきました。今日、このユニークな平和博物館をつくるという手段は、困難な世界で私たちの世界を少しでもより良く安全なものにするために、本当に頼ることのできるものであり、何を信じ、何に希望を持ち、そして何を成すべきかを考えるチャンスをみんなに与えています。私たちのような非営利の非政府の平和組織にとって、25 年は充実した期間でした。つまり毎日の平和活動が人間社会の生活に貴重なひと時を与えてくれました。それで日々の目に見えないささやか

な平和の活動が、多くの人々のためのより良い世界に変えているのです。平和のための博物館国際ネットワークは固有の文化を形成するために努力してきました。一例えば、INMP のイメージ、世界秩序についての INMP の考え方、INMP の伝統、社会・芸術的な活動、教育プロジェクト、出版、象徴的な特性、そして、専門的な創造性をもった言語さえ形作ってきたのです。INMP 自身の文化の形成は、それ自体大きな財産なのです、なぜならこの組織は、平和構築と社会的に重要なイニシアティブの促進のために効果的で必要な手段を見出したからです。

過去 25 年は、また、INMP 自身の歴史を創ることを可能にしました。様々な企画やそれらの年次的な記録、平和に貢献したヒーローや個性的な人物、ドラマチックな物語や様々な情感、失ったもの達成したものなどを見ることができます。これらのすべてが、INMP が、生き生きと世に認められ、好評かつ成功した組織として、また、創造的で社会に対応できる組織として、さらには、必要な経験と効果的な平和構築への戦略を備えた組織として 25 周年を迎えたことを示しています。これらのすべてが INMP を今日の時代の諸問題に対応できると認められた国際組織にしました。このことは重要なことなのです。なぜなら過去四半世紀の世界は劇的に変化し、さらに複雑で不安定となり、何が起こるか予測できなくなっているからです。従って INMP の 25 周年にあたって、私たちは世界の変化やさらに激動する文明の中であって、平和博物館や同時代の平和運動はどうあるべきかについて繰り返し反省させられます。

しかし、一つのこと、今すでに明らかです—それは成功した社会的なプロジェクトの育成という幅広い活動における創造的な

活動とコミュニケーションの関与に基づいた平和博物館の新しい概念の促進のために、INMP が明らかに貢献したことです。INMP のプロジェクトを通じて多くの平和博物館は、現在の緊急の要求と過去の最善の諸事例との結合のために本当に効果的な方法を発展することに成功しました。国際博物館組織にとって、INMP が成し遂げた最大のことは、将来の世界が持続できる革新的な考えや創造的な実践を打ち出す永続的な基礎になったという事実を人々が認知したことであり、これより重要なことがあるでしょうか？

私たちは 1990 年代初め、文字通り 1992 年の創設時から、このネットワークと関係を持っていることを嬉しく思います。実際世界のどの博物館にも知り合いがない中で、私たちは 1986 年に初めてサマルカンドで平和博物館プロジェクトを始めなければならなかったのです。INMP は私たちの歴史の知識と今日の平和博物館社会の発展についての知識を広げ、新しい友情とパートナーシップを築き、知識と経験を共有する機会を与えてくれました。世界中の仲間たちから励ましや勇気を得ることができ、すべての友情に満ちた支援に大きな「ありがとう」を再度述べたいと思います。これら最初の 25 年の成功がさらに次の 25 年以降へとつながっていきますように！ 25 周年おめでとう、INMP!

ピーターと INMP への感謝の言葉

キャサリン・ジョステン

「平和のためのグローバル・アート・プロジェクト」創設者／ディレクター、INPM 諮問委員



INMP とピーターに対し、創設および指導の面での努力と見識に敬意を表します。INMP を通じて私は平和のために活動している多くの人々と出会い、交流する機会を得てきました。2011年に私が諮問委員会のメンバーになってすでに6年経ちました。その間、日本の京都、スペインのバルセロナで行われたINMPの会議で、私は「平和のためのグローバル・アート・プロジェクト」（以下、「プロジェクト」と略記）の報告を行いました。バルセロナ会議では、ポスターを展示する機会がありました。「プロジェクト」に関する情報はINMPのニューズレターに何度も取り上げられました。

会議に参加した結果、私にとって積極的な意義をもつ出来事はつぎの3つです。京都會議で私はキプロスから会議に参加していたエレニ・コティアマニに出会いました。エレニは「プロジェクト」にたいへん興味を示し、キプロスの地域コーディネーターになってくれました。それ以来、彼女は平和の交換のために「プロジェクト」に参加するようキプロスの多くの学校を組織しました。この結果、キプロスの何百もの生徒が、各人の個人的なグローバル・ピースのビジョンを創造し交換するようになったのです。

私はまた京都の会議でロイ・タマシロと出会い、その後、彼と彼の学生たちが「プロジェクト」とコラボし、日本への平和ツアーの「プロジェクト」アンバサダーとなりました。

広島でのINMP会議の際、広島平和記念資料館の館長とお会いしました。その会議で、私は次の年に、「プロジェクト」の報告を広島平和記念資料館で行う機会を与えられました。

こうした機会を与えられたこと、そして多くの素晴らしい人たちと出会ったことに

対し私は感謝します。ありがとう、ピーター。

INMP25周年記念へのメッセージ

君島東彦
立命館大学国際関係学部
学部長
日本平和学会会長



INMPの25周年記念に当たり、日本平和学会を代表して、INMP統括コーディネーターのピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士およびINMP会員の皆さまにお祝いの言葉を述べることは、私の大きな喜びであり名誉であります。日本平和学会は、平和の文化を創造するため、平和学に基づいた平和教育を推進する重要性をINMPと共有しております。私たちは、INMPがこの25年にわたって平和教育への積極的な貢献を行ってきたこと、今後もより大きな達成があることを確信いたします。

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士が指摘されているように、日本は平和博物館運動が行われている唯一の国です。私たちは、日本平和学会の会議において、学校や博物館での平和教育を促進するためのワークショップを組織してきました。立命館大学の国際平和ミュージアムも今年で25周年を迎えます。2016年12月には平和教育研究センターが設立され、私たちは将来、平和研究に基づく平和教育のいっそうの発展を期しております。私は、25周年という1つの区切りに当たって、INMPを祝福するとともに今後のいっそうの発展を祈念いたします。

INMP 25 周年を祝って

小松昭夫
一般財団法人
人間自然科学研究所理事長
小松電機産業株式会社 代表取締役



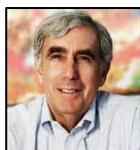
「平和のための博物館国際ネットワーク」
(INMP) 創立 25 周年に当たり、心からの
祝賀のメッセージをお送りします。

小松電機産業の人間自然科学研究所は、
2013 年、ハーグで開催された「博愛主義と
平和一昔と今」への支援など、その理念に賛
同し、活動を支持してきました。残念ながら
今、平和を希求する世界の足並みには大き
な乱れが生じています。

100 年前のアンドリュー・カーネギーの志を、
イノベーションの発達した現在に甦らせ、
現代平和学と、共感・対立・統合・発展サイ
クルの「和の文化」を組み合わせ、世界恒久
平和の流れが生み出されることを祈念しま
す。

INMP25 周年記念おめでとう

デイヴィッド・クリーガー
核時代平和財団
サンタバーバラ／カリフォルニア



INMP 設立 25 周年を記念して関係者の皆
さまに心よりおめでとうと申し上げます。
平和博物館は、私が見るところ、きわめて有
用な目的をもっています。それらは、記憶を
生きたものにする、戦争の恐怖と平和
の便益を訪問者に啓蒙すること、そして暴

力に対して平和的な代替案を提案すること
であります。あなたたちは、平和と非暴力を
祝福する諸施設のネットワークです。あな
たたちの行いは高貴であり、必要とされて
います。それはより良い世界とより平和的
な未来への貢献です。あなたたちの努力が
繁栄し、発展し、平和な世界に生きるに値
する無数の新しい世代の人々へのインスピ
レーションとなることを祈念いたします。

INMP と連帯して

ピーター・カズニック
歴史学教授
アメリカン大学
ワシントン DC 核研究所所長
『オリバー・ストーンが語るもうひとつの
アメリカ史』の共著者



親愛なる INMP の皆さま。平和やほとん
どの平和博物館の価値を信じない国から、
この 25 年間にわたって INMP が行なって
きた驚嘆すべき大きな仕事を、私は評価し
ます。私の所属するアメリカン大学の「核研
究所」は、原爆投下の 50 周年および 70 周
年記念に当たり、広島と長崎の原爆博物館
と幸運にも 2 度の展示を共催することがで
きました。2015 年の 70 周年記念には、共
催に丸木美術館の参加も得て、丸木位里・丸
木俊夫妻の原爆の図の 6 つのパネルの提供
を受けました。こうした経験を通じて、平和
教育に関して最も基本的な努力がどれほど
行われているかを私は理解できます。この
22 年間、毎年 8 月に私は学生を引率して京
都・広島・長崎に行き、可能な限り多くの博
物館を訪れることにしています。学生たち
は日本の博物館と、彼／彼女たちが本国で
当たり前前に接している博物館との違いにつ

ねに大きく心を動かされるようです。米国の博物館のほとんどは、アメリカの例外主義、軍国主義、勝利主義を祝福しています。ゆえに、私はあなたたちの不断の努力を称賛し、こうした仕事が以前にもまして重要になっていることを強調いたします。私はいまこの文章を、ドナルド・トランプが大統領になった最初の恐ろしい週を過ごした時点で書いています。そしてまた、『原子科学者会報』が「終末時計」の針を30秒も真夜中に向けて動かすのを見たところです。私たちは、INMPが世界中の無数の人々に向けて、平和と、戦争の本当の恐怖とのメッセージを広めることを拍手・賞賛しようではありませんか。

INMP への祝辞

ジーニー・ルム
ハワイ大学教授

『平和教育ジャーナル』編集者



ブラッドフォード大学において1992年に行われた最初の国際会議から25周年という記念すべき年に当たり、国際的な『平和教育ジャーナル』の編集者として祝辞を述べることをたいへん名誉に思います。2015年は、『平和教育ジャーナル』特別号として、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン氏と山根和代氏をゲスト編集者に迎え、『博物館を通じた平和教育』が出版されました。平和博物館は、戦争の文化から平和の文化への移行を促す転換空間を創造するのに、決定的な役割を果たすことができます。この分野は、機構と機能において多くの変遷を経てきました。すなわち、伝統的な受け身の観察から相互に作用し合う参加的な関与へ、単なる

記念から平和運動における教育の力としての記憶の喚起への変遷です。私は、正規の教育機関および様々な活動分野における非正規の機関と博物館との協働において、一層の発展と統合が行われることを期待しています。そのことが地方のコミュニティの内部において、さらにはそれを超えるグローバルな世界に向かって、市民意識を喚起し、そして良心的、意識的、平和志向的な市民を創造するでしょう。私は、平和博物館の分野で働いている人々が論稿を発表する開いた場として、『平和教育ジャーナル』を引き続き見てくださるようお願いいたします。そうすれば現在および将来にわたって大きな前進が期待できるでしょう。アロハ！

お祝いのメッセージ

平和首長会議会長
広島市長 松井一實



「平和のための博物館国際ネットワーク」の創立25周年を心からお祝い申し上げます。25年の長きにわたり、志を同じくする世界の博物館の連帯を通じ、戦争の悲惨さと平和の尊さを世界に伝えるとともに、平和学を始めとする学術の発展に寄与されてきた貴団体の活動に深く敬意を表します。

国際情勢が不透明な昨今、平和な未来の創造に向けては、私たち一人一人が平和への思いを共有し、連帯して取組を継続していかなければなりません。その意味において、社会教育施設として特に平和に積極的に取り組む博物館のネットワークを構築し、市民社会の中で平和文化の普及に尽力しておられる貴団体の果たす役割はますます

す重要なものとなっており、今後の取組に大いに期待しています。

世界162か国・地域の7,200を超える都市が加盟する平和首長会議も、各都市の首長が都市相互の緊密な連携を図り、核兵器廃絶に向けた市民意識を国際的な規模で喚起する取組を推進しており、これからも、幅広く市民社会と協働し、世界恒久平和の実現に向けて力強く活動してまいります。

終わりに貴団体と会員の皆様の更なる御発展をお祈りするとともに、世界恒久平和の実現という共通の目標に向け、今後も我々と共に力を尽くし行動して下さることを願い、お祝いのメッセージとさせていただきます。

INPM の 25 周年

フェデリコ・メイヤー
ユネスコ元事務局長
(1987-1999)

「平和の文化」会長 (2000-)



平和のための博物館は、「平和は可能だ」という個人的なそして集合的な意識を育むための堅固なそして有効な空間です。創造と予見という特別の能力を併せ持った人類は、力と支配と戦争の文化から、対話と和解と協力の文化への移行を達成できるし、またしなければなりません。すなわち、「平和を欲するなら戦争に備えよ」から「平和を欲するなら話合いに備えよ」への移行です。25周年を迎えた INMP に心から「おめでとう！」と申し上げます。力から対話への歴史的な転換のために、多くの博物館がこの偉大な行動のための機関である INMP に参加

されんことを。

「あなたが欲するなら戦争は終わる。
不幸にも仕事はまだ終わっていない。
INMP の誕生日、おめでとう！」

ロジャー・マユ

国際赤十字・赤新月社会長
ジュネーブ



私の INMP との最初の遭遇は、2005 年にゲルニカで完全に組織された第 5 回国際会議においてでした。私は、人間の未来にとって枢要な思想—すなわち、平和！—のまわりに形成された 1 つの組織を見出したのでした。私はまたこの組織は積極的な関与、情熱、献身をともなう質の高い人々によって運営されていることを知りました。ゆえに私は、当初は理事として、その後は諮問委員として理事会の運営への参加を承諾いたしました。私たちの会合は真剣でした。そして大きな仕事をやり遂げました。会合は溢れる笑いと人間的な談話でしばしば中断しましたが、それこそが良いアイデアを生む創造性に必要なものでした。すべての国際会議と理事会における同僚たちの素晴らしい思い出を私はいまも保持しています。同僚たちとの協働は私にとって真の喜びでした。

2008 年に行われたジュネーブにおける会合で、私たちの常設展示の転換計画の進展を理事会で報告しました。そのラウンドテーブルでは参加者全員が報告に対して意思表示を行うことができました。このようにして INMP と国際赤十字・赤新月博物館の転換とが親密に関連するものとなりました。こうしたことすべてを可能にした統括コーディネーターのピーター・ヴァン・デン・デュンゲンの人間性に私は敬意を表したいと思います。この 25 年にわたる彼の INMP へ

の貢献に私は心から感謝いたします。彼と話すことは、私たちのネットワークに対してと同じに、つねに私にとって個人的に豊かな経験でありました。

誕生日というものは、未来を見るための1つの口実とされるときにのみ意味を持ちます。しかし、不幸にも私は2005年において、12年後に世界がより悪い方向に変わるとは考えていませんでした。このことは、私たちの関与、展示、そして教育プログラムがよりいっそう重要となったことを示しています。

「私は死ぬ準備はしています。しかし、そのために人を殺す準備をする大義などはありません。」とガンディーは言いました。「すべての人はすべてのことに関してすべての人に責任を負う。」とドストエフスキーは言いました。これらの言葉によって、われわれの訪問者は迎えられます。平和の必要性がいままでよりもいっそう切実になった現代において、これらはとりわけ適切な言葉となっています。

博物館と遺産を通して 平和と人権擁護のために

イラチェ・モモイショ

ゲルニカ博物館館長

「平和への道はない。
平和がその道である。」

(マハトマ・ガンディー)



平和のために日々働いている多くの組織があります。それらはとても必要です。しかし、平和のための博物館のために専一的に働いているのは、INMPだけです。

私はINMPを1998年に知りました。それより前の日本での会議には私は出席できませんでした。同じ1998年に私たちはゲルニ

カ博物館を開館しました（今日ではゲルニカ平和博物館財団と呼ばれています）。そして最初から私はこうした博物館のネットワークに関心を持ちました。私たちはINMPから影響を受け、名称を変えただけでなく、テーマの拡張を行い、歴史と記憶を平和と人権に結び付けました。こうして、私たちの博物館は、スペインのバスク地方における唯一の平和博物館となったのです。

この最初の出会いから数年後、私はベルギーのオステンドで開催された第4回会議に参加しました。そこで私は、2005年の次回の会議は、ゲルニカ平和博物館が主催することを提案しました。

(エネルギーに満ちあふれているにしても)このような小さなチームにとって多大の努力を要しましたが、INMPの統括コーディネーターのピーター・ヴァン・デン・デュンゲンに助けられ、私たちはあのような素晴らしい会議を組織することができました。その標語は「平和博物館：記憶・和解・芸術・平和」というものでした（ゲルニカ、2005年）。30以上の国々から130人もの人々が会議に出席しました。その会議はINMPの歴史の中でもきわめて重要なものでした。とりわけ次の理由からです。ここゲルニカにおいて、私たちは、平和ミュージアムの定義を、それによってより多くの博物館やセンターを包含するため、平和ミュージアムから平和のためのミュージアムに拡張したのです。その時から、INMPの執行委員会あるいは諮問委員会のメンバーとしての私の活動と、ゲルニカ平和博物館の活動とが一体のものとなりました。

25周年を祝うことは、これまで私たちが何をしてきたかを回顧するだけではなく、私たちは何をすべきであったのかを反省し、またこれから何をすべきかを考えるためにこそ重要です。私たちの住む暴力的な世界は、「平和の文化」を発展・促進させるため

に、より多くの機関やネットワークを必要としています。

INMPは、今後も存続していくために、多くの困難に直面しています（活動的な新会員、新しいアイデア、より多くの平和慈善家が求められています）。けれども私は、INMPの50周年記念（2042年）には、再びメッセージを書くことを密かに希望しているのです。

「平和の文化」をあらゆる種類の投資に浸透させる要求をして行きましょう。博物館、展示、ワークショップ、文化遺産の活動を通じて（そしてこうした活動の重要性を訴えるキャンペーンを通じて）、生命と人権の尊重が、破壊と戦争ではない、私たちのすべての活動の中心に置かれる、そうしたより良い世界に向けて共に仕事を続けて行きましょう。

お祝いのメッセージ

長崎原爆資料館 館長
中村明俊



平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）創立25周年を心からお祝い申し上げます。また、総括コーディネーターのピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士をはじめ関係各位の御努力に心から敬意を表します。

1996年に開館した長崎原爆資料館は昨年、開館20周年を迎え、展示内容を更新しました。現在、国内外から多くの方々が来館されており、原子爆弾がどれほど恐ろしい兵器であるのか、これまで以上にわかりやすくお伝えできるものと考えております。

戦争と核兵器のない世界の実現のために

平和のための博物館が果たす役割は大きく、相互がネットワークを築いて協力してことは、今後、ますます重要な取り組みになってくものと考えております。

25周年を契機として、INMPのさらなる発展と御活躍を心から期待しております。

平和博物館ネットワーク 25周年 おめでとうございます

平和教育国際研究集会(ニューヨーク) 創始者・初代代表、
パソス平和博物館 (ニューヨーク) 顧問会議理事
ベティ・リアドン



平和博物館ネットワークとその会員の皆様にこのご挨拶を送らせていただくことをとても嬉しく思っております。会員の皆様は、このネットワークを通じて協力し、世界的な平和教育運動に重要で非常に貴重な独特の貢献をしてこられました。平和の学びは人々が平和を効果的に作る主体となるために適切な知識や経験を求めるすべての場所にあります。この学びはそれを提供しようとする決意しているどのような博物館においても成立するでしょう。平和博物館は教育のすべての分野において学びの機会を提供してきたこと、これからも提供できることにおいて独特な存在です。その学びは公式な学校教育においても、非公式な民間の活動においても提供され、子どもたちのための特別活動から学術研究者のための学術的な講義や一般大衆向けのプログラム公開まで多岐にわたっています。博物館はすべての学ぶ聴衆に対して働きかけ、平和に関するすべての形式の学びを提供し、最高の水準の学びを届けることができます。

私はこのネットワークの活動や会議に参加して、このような可能性があることをよく実感してきました。ニューヨークのパソス博物館では同館設立当初から関わらせていただいていますし、立命館大学平和ミュージアムでは教員対象の講義やワークショップをさせていただき光栄に浴しました。このお祝いのメッセージを書いております。今、パソス平和博物館は、平和教育国際研究集会と協力して、市民社会の参加者のためのシンポジウムを準備しているところです。このシンポジウムは国連女性の地位委員会の年次大会の中で実施されるもので、平和博物館が携わる多分野にわたる活動の一つの例と言えるでしょう。アンドリュー・カーネギーの顕著な平和への貢献に対する平和博物館ネットワークの表彰式もありました。このような私が経験してきたことは平和博物館の平和教育運動への貢献のほんの一部にすぎません。平和博物館ネットワークを通して、このような努力を分かち合い、それに触媒作用を及ぼすことはこの分野において計り知れない価値があります。今はすべての平和に向かって努力する人々が団結して立ち上がり、私たちの努力を活気に満ちた効果的な世界的運動にまとめ上げていく時代です。私は平和博物館国際ネットワークと団結して立ち上がることに誇りを持っています。次の25年もこれまでの25年のようにその貢献を拡大し続けられますようお願いしております。

INMP25周年おめでとうございます

平和のためのドイツ女性
ネットワーク
会長 ハイデ・シュエツ



私が1980年代に平和博物館の概念について学んだ時、この革新的な考えに大変感激いたしました。それまでは私は戦争博物館にしか出会ったことがなかったのです。そこでは先の戦争のすべての恐怖で心が塞がれてしまいました。来館者が戦争に代わるものについて戦争博物館で学べることはまれでした。平和や和解を作り出す過程、または平和を作り出した男性や女性の模範となる人物についての展示は滅多になかったのです。

1980年代以降、平和博物館は平和の文化に大きく貢献してきています。特に今、軍国主義の台頭や、国粹主義・他国の人々への敵意・国境封鎖の精神の復活の時代において、平和の文化は私たちが必死になって求めているものです。平和博物館は人々の目を平和の可能性と必要と利点に対して開くために援助し続けています。そして平和を作り出す道筋とこの分野における模範となる女性や男性について学ぶ機会を提供しています。私たちはそのことにとっても感謝しております。そして平和博物館ネットワークの創立者の皆様とこのネットワークの維持と発展のためにご尽力された皆様に感謝を捧げたいと思います。すばらしい50周年を迎えられますように、次の25年間も、どうか他のどのような原理にも増して平和の論理を第一に追及することを続けられ、平和博物館・平和記念碑・平和の遺跡巡りの順路紹介などの偉大なアイデアを更に発展させてください。

今後もよろしくお祈いします。平和のためのドイツ女性ネットワークより深い感謝と共に。

平和博物館国際ネットワークの 25 周年への祝辞

Crosscurrents International
Institute (アメリカ合衆国)
創業者・会長
デイトン国際平和博物館 (ア
メリカ合衆国) 名誉役員
ウィリアム・P. ショー



平和博物館国際ネットワークは、様々な国や文化、政治体制の人々が、私たちの壊れやすい惑星の上で、平和の目標を達成するために共通の場を探し求め、協力するという価値あるネットワークを提供してきています。これは私たちの集会的な世界的な挑戦なのです。平和博物館国際ネットワークは、それ自体の規模は小さくても、人々をまとめる鍵となる重要な役割を果たし続けています。このネットワークが成長し続け、善良な意思を持つすべての人々のためのネットワークを構築しますように。

平和のための博物館国際ネットワーク 創立 25 周年に寄せて

広島平和記念資料館 館長
志賀 賢治



平和のための博物館国際ネットワークが創立 25 周年を迎えられますことを、謹んでお慶び申し上げます。

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン統括コーディネーターをはじめ、INMP の立ち上げと運営に尽力して来られた皆様に、心より敬意を表します。

広島平和記念資料館は、2008 年の第 6

回国際平和博物館会議の開催に共催参加する機会を得ました。平和を目指す世界の博物館が、それぞれのテーマに真摯に取り組む姿勢に触れ、自らの果たすべき役割を再認識できたことは、現在行っている全館リニューアル事業にも生かされていると思います。

INMP が、研究・教育・運動の各分野において今後ますます活発に機能し、世界の平和博物館相互の情報共有や協力関係の強化に寄与されますことを期待いたします。

INMP25 周年に際してケニアからの メッセージ

ケニア国立博物館民族学
部前部長 (ケニア・ナイロビ)
ケニア平和博物館創業者
サルタン・ソムジー



私が初めて平和博物館国際ネットワークの献身的な先駆者の方々とコンタクトを取ったのは 1998 年のことでした。それは日本の京都の平和博物館での第 3 回国際会議でのことでした。インド洋とアジア大陸を越えて、アフリカの赤道直下から参加して、私は長旅ですっかり疲れてしまいました。そして会議でいろいろな発表を聞いて緊張していました。その発表内容は私がケニアで実施しているプロジェクトや平和博物館の内容と随分違うものでした。ほとんどの発表は第 1 次・第 2 次世界大戦の燃え滓や灰から平和を作ることに聞こえました。戦争の遺物が博物館の展示となり、戦争の場面が立体小型模型の背景になっていました。私は困惑していました。

ケニアでは世界大戦について語るべき話がそれほどなかったのです。1990 年代に私

私たちはまだ植民地主義から回復しつつあるところで、独立後の開発途上国支配政策と、激化する民族間対立の真ただ中で国粋主義に直面していました。平和博物館は、市民社会の和解の探求と、私たちの威厳と文明に残されたものの救済のために、この現実の中で生まれました。これらはアフリカの先住民文化の中に見つけたもので、人道的な価値観の中に根差し、アフリカ人の観点からの平和博物館の核となるものでした。私たちの博物館は、物語、歌、踊りが、地域共同体における平和創造の遺産である記憶を喚起する場でした。「ウツ」というスワヒリ語は、幸福な状態と人間性の概念を包含している「平和」を意味していますが、それを祝う芸術の中にあるようなものです。その中では、和解の儀式で使われる物質的な文化の展示も立体小型模型になっています。

私の発表はひどいものだったと私は感じていました。価値を認めても頂くことはおろか、内容を理解してもらうこともできませんでした。食事の時には気まずくて逃げ出したいと思いました。そのときピーター・ヴァン・デン・デュンゲン教授にお会いしたのです。彼は握手をしてこう言ってくださいました。「アフリカから学ぶべきこと、平和博物館に対する新しい革新的な手法がたくさんありますね。」

私はピーターの言葉に心を打たれて帰国しました。彼のその一言がその後10年間、宗教の真言のように私の心に重要な位置を占めていました。その言葉は、私がアフリカから北半球の定評ある豊かな平和博物館の広大なネットワークに対して貢献する意欲をかき立ててくれました。動機づけとなり続けました。私は、アフリカから異なった取り組み方が出てくるのではないかと思いました。今日に至るまで北半球の人々の心の中

で「後進性」というよくないイメージを持たれているアフリカから。

今日、ケニアには16の平和博物館があります。そして16人の訓練を受けた学芸員・研究者が多様な民族の間で草の根レベルで働いています。カナダのブリティッシュコロンビア大学の博士課程に留学中の研究者は、ケニアを例として紛争地域にある平和博物館に関する研究を行っています。またイギリスのイースト・アングリア大学の博士課程に留学している研究者はウガンダの地域共同体博物館とケニアの平和博物館に研究の焦点を当てています。

この19年間、ピーターと私の友情は、電子メールの定期的な交換と平和博物館国際ネットワークの発展を通して育ってきました。彼を介して、私は安齋教授、山根和代教授とお会いしました。お二人とも平和博物館国際ネットワークの進化のために献身してられました。彼らの日本平和博物館と市民のためのネットワークとのかかわりと、山根和代さんの日本の草の根平和博物館に関する博士論文は一般大衆と協力して作業する素晴らしい例です。

力量が限られてはいますが、ケニア人の独創力も彼らの仕事に匹敵するものです。私たちは意識を高めるための平和博物館へのより大きな市民の関わりについて、地域社会においても、世界規模の広がりにおいても将来像を共有しているのです。

平和博物館国際ネットワークの国際会議では、ピーターはアフリカの草の根の市民社会のよく知られていない実践を含む平和博物館への理解を広げることにずっと深い関心を寄せてきました。彼は、2001年にはケニアの地域社会平和博物館の3人の外国人後援者の一人になることを承諾してくれました。私たちは本当に名誉なことと思

ました。

今日、財政上の停滞にもかかわらず、ケニアの平和博物館は東アフリカ地域の平和の灯となっています。この地域では民族間の緊張や断続的な紛争がたびたび起こっていますし、新しい資源が発見されて、資源を獲得するために北半球の先進国間の競争が増加すると紛争がさらに激化しています。ですから、平和博物館国際ネットワークに所属することは元気づける抱擁を受けるようなものです。それは「私たちはあなた方と一緒にいますよ」と言ってもらっているような抱擁です。そうです、平和博物館国際ネットワークは国境なき平和博物館を作る見込みがあります。先進国の平和博物館は紛争地域の地域社会平和博物館を援助しますと言ってもらっているようでもあります。紛争地域では、その政府が悪政や汚職、独裁などで手一杯になっている時に、平和博物館は平和のためだけでなく、社会正義、人権、平和的多元的共存のためにも苦闘を重ねているのです。

平和博物館国際ネットワーク 25周年を祝して

国連代表国際平和局（ニューヨーク）ハグ平和アピール
会長 コーラ・ワイス



おめでとうございます！核兵器使用に関する節度のない談話や、核兵器を持つ国々を増やすという話さえ耳に入ってくるこの終わりなき戦争の時代において、平和博物館は特に重要な役割を担っています。たとえ何が専門の博物館であっても、すべての博物館が平和博物館をそれぞれの中に一部屋開設したらどんなに素晴らしいでしょう

か。子どもたちは家から何か平和を表すと思うものを持ってくることができるでしょう。私たちは若い人々に平和がどのように見え、どのように感じられ、どのようなにおいがするかさえ示す必要があるのです。平和な記念日をお迎えください。

ブラッドフォード大学からのメッセージ

ブラッドフォード大学平和
学学部名誉教授
トム・ウッドハウス



平和研究の偉大な先駆者の一人であるエリス・ボールディングはこのように書いています。「お祝いは人生の要素です。私たちは太陽暦の1年の季節の変化を祝い、個人的な人生の大きな行事を祝い、歴史の変化を祝います。」昨年、2016年の9月に私たちはもう一人の先駆者であるアダム・カールの記念式を行って祝いました。彼はイギリスのブラッドフォード大学平和学学部の創立者です。アダムもエリスも、世界的な平和文化の進化を人間性に直面する最も大きな挑戦として見ました。平和教育の先駆者の多くの人々のように、彼らは、暴力の文化の構造に対して代替システムとなる、平和な社会や政治を想像できる場を創り出す必要と長期的展望のある考えを強調していました。平和博物館は物理的・教育的な場を開く文化的財産です。そこで私たちは幸せな非暴力の惑星を維持するために必要な考えを想像し、探求し、発展させることができます。先駆者の人々の精神に則ってこのネットワークの25周年を祝うことは特に時期を得たものなのです。平和博物館国際ネットワークの将来を見通した仕事、またそのネットワークに関わっている、人々

の心を動かして何かせずにはいられないと思わせるような世界中の人々の仕事を祝うということだからです。

INMP25 周年への記念メッセージ

安江直人
安西メディカル株式会社

INMP25 周年、おめでとうございます。INMP が、全世界の平和のための博物館のネットワークを強化することを通じて、平和への諸活動を一層発展させることを心から望みます。

※注：安江さんの要請で顔写真の掲載を致しませんでした。

「平和のための博物館国際ネットワーク」創設 25 周年への記念メッセージ

立命館大学学長
吉田美喜夫



第二次世界大戦後、立命館大学は教学理念として「平和と民主主義」を掲げてきました。その理念を実践する一環として、1992 年、立命館大学は世界初

の大学立の本格的な平和博物館である「国際平和ミュージアム」を開設しました。それは国際平和博物館ネットワーク誕生の年でもあり、その後 1998 年と 2008 年の 2 度に渡って国際平和博物館会議が開催されてきました。立命館大学はこれまで、100 万人をこえる参観者が訪れた国際平和ミュージアムの活動に加えて、世界大学生平和サミット、アジア平和博物館会議、アジア太平洋大学学長平和フォーラムなどを開催、2006 年には「立命館憲章」を制定して、「自主、民主、公正、公開、非暴力の原則」を確認しました。

世界は紛争や様々な暴力を免れていません。今こそ、平和のための共同の努力を発展させるべき時です。私は、貴ネットワークと国際平和ミュージアムの 25 周年を祝賀できることを嬉しく思うとともに、今後さらに共同関係が発展することを心より期待します。

おめでとうございます。



たくさんのメッセージを頂いて

このニューズレター特集号を最初に企画したとき、このように沢山の団体・個人からメッセージを頂く予定はありませんでした。編集に当たっていたピーター・ヴァン・デン・デュンゲンと安斎育郎がそれぞれ関係者に声をかけているうちに、「それじゃあ、あの人にも」とだんだん増えていってこんなに多くなりました。

メッセージには過去 25 年の努力に対する賞賛と今後に対する期待が述べられていますが、それに応えるためには INMP 自身の厳しい改革が必要とされています。

INMP 出版物

〈平和博物館に関する論文や情報〉

下記の出版物は平和のための博物館に関するもので、
INMPの著者、編集者、理事によるものです。

1993

平和博物館：平和教育のために？ Peace museums: for peace education?

編集：Ake Bjerstedt

スウェーデンのマルモ大学教育学部



1998

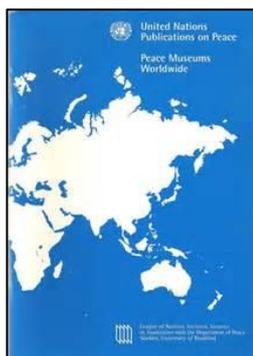
世界の平和博物館 “Peace Museums Worldwide”

国連、ブラッドフォード大学平和学部編集・出版



1995

世界の平和博物館 “Peace Museums Worldwide” 国連、ブラッドフォード大学平和学部編集



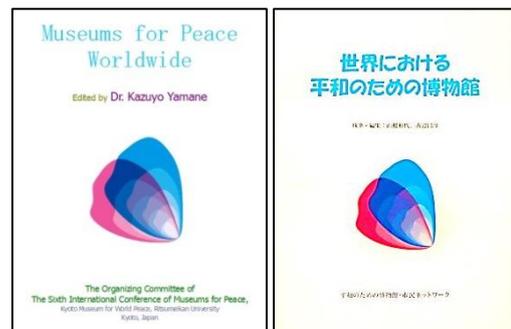
2008

世界の平和のための博物館 “Museums for Peace Worldwide”

山根和代編

第6回国際平和博物館会議組織委員会出版
国際平和ミュージアム

※日本語版は、山辺昌彦、山根和代が編集

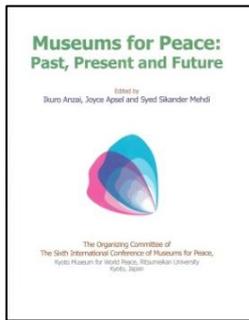


2008

“Museums for Peace: Past, Present and Future” 平和のための博物館：過去、現在、未来

安齋育郎、ジョイス・アップセル、サイド・シカンダー・メーディ編集

第6回国際平和博物館会議組織委員会出版
国際平和ミュージアム



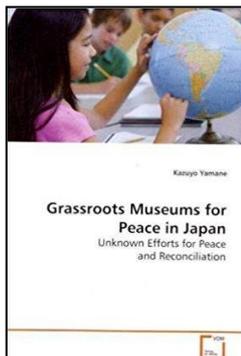
2009

日本における草の根の平和のための博物館：知られ座主平和と和解の努力（英文）

“Grassroots Museums for Peace in Japan: Unknown Efforts for Peace and Reconciliation”

山根和代著

出版：ドイツの Saarbruecken の VDM Verlag Dr. Mueller

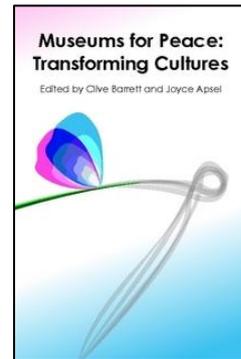


2012

平和のための博物館：文化の転換
“Museums for Peace: Transforming Cultures”

編集：クライブ・バレット、ジョイス・アップセル

ハーグの INMP 本部出版



2014

平和の発見：ハーグの平和の足跡 “Discover Peace—The Hague Peace Trail”

マーチン ヴァン ハーテン著

編集：ピーター・ヴァン・デン・デュンテン、ニケ・リスカレット

INMP ハーグ本部出版



2014

上記の本のオランダ語版 “Discover Peace – Den Haag Vredesroute”



2015

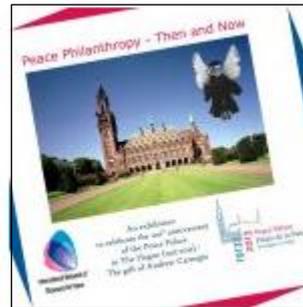
Journal of Peace Education, Special Issue, Vol.12, No.3, December

平和博物館を通した平和教育
平和教育ジャーナルに掲載した特集
編集:ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根
和代



平和の篤志家についての電子書籍 〉
著者: Peter van den Dungen
編集: Petra Keppler and Marten van

Harten
レイアウト: Nike Liscaljet / info@cerium



2016
平和博物館の紹介“Introducing Peace
Museums”
ジョイス・アプセル著 Joyce Apsel
ロンドン、ニューヨーク: Routledge 出版



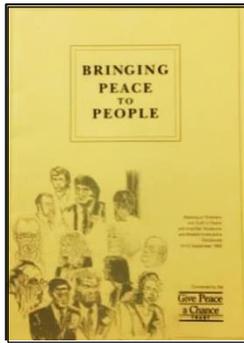
『平和の篤志家: 当時と今』という移動展示物
(2013年制作)の電子書籍が無料で次のウェブ
サイトからダウンロードできます。

[http://www.peace-
institute.com/publications](http://www.peace-institute.com/publications)

〈INMP 国際会議の報告書〉

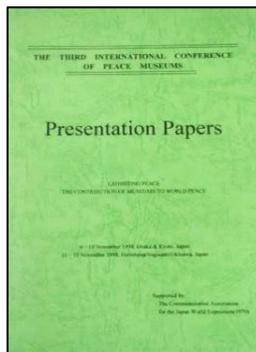
1993
平和を人々へ: 英国に平和のための博物館を
“Bringing Peace to People/Towards a
Museum for Peace in the United
Kingdom” 1992年9月10-12日ブラッドフ
ォードで開催された第一回平和博物館国際会

議の報告
[Report of the] Meeting of Directors and
Staff of Peace and Anti-War Museums
and Related Institutions Worldwide
Hertford: Give Peace a Chance Trust 出版

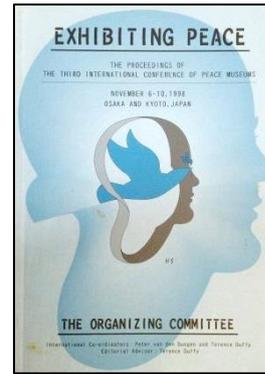


1995
 “国際会議予稿集 Presentation Papers”

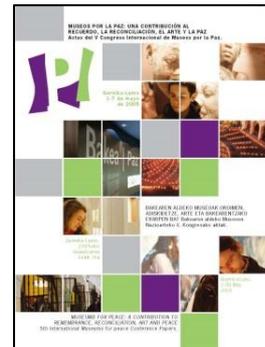
第3回国際平和博物館会議の報告集。大阪国際平和センターと国際平和ミュージアムが組織し、1998年11月6-10日に開催された。組織委員会編集、出版



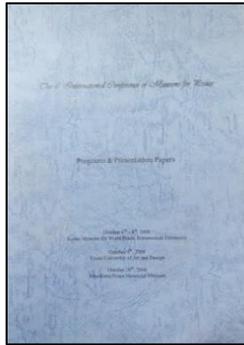
1995
 “平和の展示 Exhibiting Peace”
 第3回国際平和博物館報告集
 国際平和ミュージアム



2006
 平和のための博物館：記憶、和解、芸術、平和への貢献 “Museums for Peace: A Contribution to Remembrance, Reconciliation, Art and Peace”
 第5回国際平和博物館会議報告集
 スペインのゲルニカにて 2005年5月1-7開催
 編集：ゲルニカ平和博物館館長イラツチェ・モモイシヨ編集



2008
 第6回国際平和博物館会議プログラムと報告集 “Programs and Presentation Papers”
 京都と広島にて 2008年10月6-10日開催
 組織委員会（国際平和ミュージアム、京都造形芸術大学、広島平和記念資料館、東北芸術工科大学、立命館大学アジア太平洋大学）



2009

第六回国際平和博物館会議報告集
 “Proceedings of the 6th International
 Conference of Museums for Peace”
 組織委員会（国際平和ミュージアム、京都造
 形芸術大学、広島平和記念資料館、東北芸術
 工科大学、立命館大学アジア太平洋大学）

※日本語版も同時に出版されました。



英語版



日本語版

2011

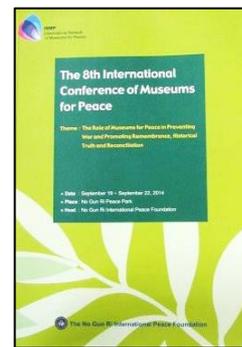
戦争・暴力の文化から平和・非暴力の文化へ
 の転換における博物館の役割 “The role of
 museums in the transformation of a
 culture of war & violence to a culture of
 peace & nonviolence”
 第7回国際平和博物館会議プログラムと要
 旨
 スペインのバルセロナで 2011 年 5 月 4ー7
 日開催
 編集：ニケ・リスカリエット

ハーグの INMP 本部出版



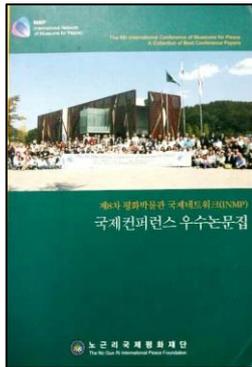
2014

第8回国際平和博物館会議報告集：戦争を
 防止し記憶、歴史的真相、和解の促進におけ
 る平和のための博物館の役割
 “The 8th International Conference of
 useum for Peace—The role of museums for
 peace in preventing war and promoting
 remembrance, historical truth and
 reconciliation”
 2014 年 9 月 19ー22 日韓国ノグンリ平和公
 園にて開催
 ノグンリ国際平和財団出版



2014

第8回国際平和博物館会議：報告選集 “The
 8th International Conference of Museums
 for Peace – A Collection of Best Conference
 Papers”
 ロイ・タマシロ、山根和代編集
 ノグンリ国際平和財団出版



2014

第8回国際平和博物館会議参加者の感想文集

安齋科学・平和事務所（INMP 日本支部）

2014

第8回国際平和博物館会議写真集

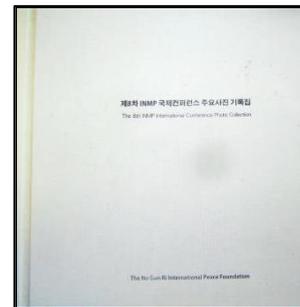
）“The 8th INMP International Conference Photo Collection”

ノグンリ国際平和財団

2014

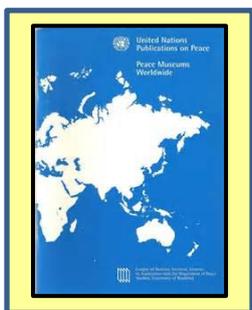
第8回国際平和博物館会議報告要旨集

安齋科学・平和事務所（INMP 日本支部）

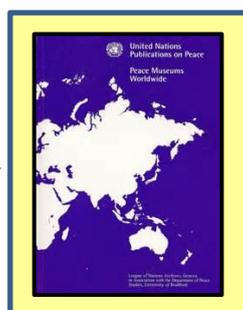


“世界の平和のための博物館ガイドの更新”

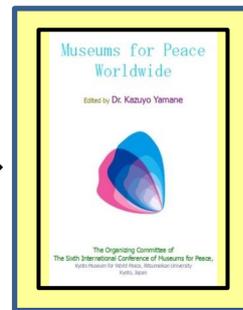
INMP 理事の山根和代氏は平和教育者、平和研究者ですが、「世界の平和のための博物館ガイドブック」（英語版）の更新を熱心に行っています。2008年に彼女が編集したのは、冊子として出版されました。日本語版は、山辺昌彦氏と編集し、出版されました。この更新は、多くの新しい平和博物館が創設され、また古い博物館は展示のリニューアルをしたので、更新は非常に望ましく価値のあることです。山根氏はできるだけ総合的で正確な内容にしようと、世界各地の平和博物館の館長と連絡を取っています。今後も更新はされ、最新版は安齋科学・平和事務所のホームページで入手可能です。それは2017年4月10-13日ベルファストにおける第9回国際平和博物館会議を記念して、行われました。HP → <http://asap-anzai.com/>



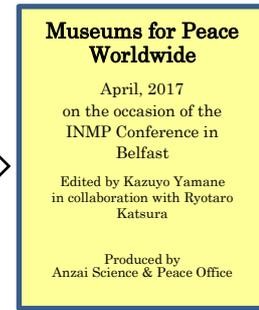
1995(paper)



1998(paper)



2008(paper)



2017(web)

INMP 現在および過去の役員

執行理事と諮問委員

安齋郁郎

立命館大学国際平和ミュージアム
元館長、現在終身名誉館長
安齋科学・平和事務所所長
平和のための博物館市民ネットワーク通信
「ミュージズ」と英文通信 Muse 編集委員
INMP 通信編集委員



スティーブ・フライバーグ

Steve Fryburg

アメリカオハイオ州のデイトン
国際平和ミュージアム及び平和アー
ラリーの Missing Peace Art Space の元館長。
INMP における元会計担当及び元ウェブマス
ター



ジョイス・アプセル Joyce Apsel

ニューヨーク大学教授
国際平和・人権・大虐殺教育機関
(Rights Works International) 代表
大虐殺研究所所長、国連 NGO/DPI(広報局)に
おける INMP 代表



ティモシー・ガチャンガ

Timothy Gachanga

ケニアにおける地域平和博物館遺産
財団(CPMHF)代表。
東アフリカカトリック大学、たんガザ大学に
おいて平和教育、紛争解決、紛争転換につい
て教える。



クライヴ・バレット

Clive Barrett

英国ブラッドフォード平和博物館
理事長、英国教会聖職者として全宗教間相互
理解推進、キリスト教の和解のために活動。
リーズ大学神学及び宗教研究の客員研究員



アナトリー・イオネソフ

Anatoly Ionesov

ウズベキスタンのサマルカンド
における国際平和・連帯博物館
及び国際エスペラント友好クラブの創設者



クド・チャン Koo-do Chung

韓国ノグンリ国際平和財団代表
ノグンリ大虐殺に関する真相究明
委員会の元代表



サジド・イシャク Sajid Ishaq

パキスタンのイスラマバードに
おける貧困撲滅のための異宗派間
連盟(I-LAP)創設者及び代表。パキスタンに
おける異宗派間平和博物館の創設者。



ロニー・フランクス

Lonnie Franks

アメリカオハイオ州デイトン国際
平和ミュージアム理事、21世紀平和リタラシ
ー財団共同創設者、世界における平和行進プ
ログラム事務局長、INMP 会計担当



キャサリン・ジョスティン

Katherine Josten

アメリカでグローバルアート
プロジェクト創設者・代表。彼女の受賞作品
は博物館所蔵品に含まれている。
その前に大学で14年間芸術教育担当。



シャハリア・カテリ

Shahriar Khateri

イランのテヘラン平和博物館
広報部共同創設者及び元代表。
オランダのハーグにある化学兵器禁止機関
(OPCW)国際協力援助局援助保護課の上級職
員



ヨンファン・キム

Yeonghwan Kim

韓国のソウルにある平和博物館
センターの元コーディネーター。
高知市にある平和資料館「草の家」の元事務
局長



アン・C・ケリング

Anne C. Kjelling

ノルウェーのオスロにあるノル
ウェーノーベル研究所の元図書館
長。またオスロにあるユダヤ博物館の創設者。



バルクリシュナ・クルヴェイ

Balkrishna Kurvey

インド平和・軍縮・環境保護研究
所所長。インドのナグプールに
ある「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ
平和博物館」の創設者及び名誉館長



ジェラルド・ロスブロク

Gerard Lössbroek

オランダの平和と非暴力のための
博物館で保管文書担当。INMP で
国際パックス クリスティとの連絡担当。
INMP Facebook の共同編集者。



ジェスパー・マグヌソン

Jesper Magnusson

スウェーデンウプサラ平和博物館
もと教育担当。点在、改名後のピースハウス
の館長。



ロジェール・マヨウ

Roger Mayou

スイスのジュネーブにある国際
赤十字赤新月博物館館長。博物館
の常設展示の拡大とリニューアルを監督し
た。



サイト・シカンダー・

メディ Syed Sikander Mehdi

パキスタンのカラチにある
ビジネス工科大学教授。元カラチ大学国際関
係学部長及び教授



イラツチェ・モモイショ

Iratxe Momoitio

スペインバスク地方ゲルニカ平和
博物館の 1998 年創設以来館長。
彼女は平和、人権、戦争の記憶、歴史に関す
るいくつかの国際ネットワークに積極的に
関わっている。



キャロル・ランク

Carol Rank

英国子ヴェントリー大学の信頼・
平和・社会県警センターにおける平和紛争研
究の元上級講師で最近退職する。現在は研究
フェロー。彼女はブラッドフォードの平和博
物館で最初の展示企画を担当した。



ルチェッタ・サンギネッティ

Lucetta Sanguinetti

イタリアのトリノにある平和
博物館創始者。
イタリア平和自治体連合理事
(Co.Co.Pa.).



エリック・ソメルス

Erik Somers

アムステルダムにあるオランダ戦争・ホロコースト・ジェノサイド研究所(NIOD)研究員。第二次世界大戦や戦争の記憶に関する展示の学芸員でもある。



ロイ・タマシロ

Roy Tamashiro

米国ミズリー、セントルイス市ウェブスター大学学際的研究学部教授
国際研究委員会共同代表、世界的ウェブキャストで会議や報告へのチャットや対話での参加を促すグローバルフォーラムプロジェクト代表



サルタン・ソミー

Sultan Somjee

ナイロビの国立ケニア博物館
元民族誌担当代表、地域平和博物館遺産財団(CPMHF)創設者



ピータ・ヴァン・デン・
デュンゲン

Peter van den Dungen

英国ブラッドフォード大学平和学元講師(1976-2015)、平和歴史家、INMP 統括コーディネーター(1992-2017)、INMP 名誉コーディネーター。INMP 通信編集長



リヴ・アストリッド・

スヴェルドルプ

Liv Astrid Sverdrup

ノルウェーのオスロにあるノーベル平和センターの展示担当代表及び副所長。ノルウェー防衛大臣の元上級顧問、ノルウェー政府核軍縮・核拡散防止諮問委員会メンバー



山根和代 **Kazuyo Yamane**

立命館大学平和学元准教授、
国際平和ミュージアム元副館長

「平和のための博物館・市民ネットワーク」
通信ミューズ編集委員及び INMP 通信編集委員



オランダのハーグにおける INMP 事務局

ニケ・リスカリエット

Nike Liscaljet

INMP 事務局担当
パート労働で唯一雇用された。



マーティン・ヴァン・ハーテン

Marten van Harten

独立した歴史研究者&
コンサルタント(2011-)



ボランティアの紹介

ペトラ・ケプラー Petra Keppler

ハーグの INMP 事務所の名誉所長 (2015ー)

橋本典子 Noriko Hashimoto

研究者、INMP Facebook と INMP Timeline の共同編集者(2016ー)

ジェイン・プルフォード Jane Pulford

INMP のウェブマスター及び INMP Timeline の共同編集者(2016ー)

ジョス・ヴェルホフ Jos Verhoeff

INMP 文書のデジタル化担当 & INMP website の技術的支援者(2015ー)

*特に 2015 年以降 INMP 事務所では、世界各地で平和を希求するボランティアの学生を受け入れています。ペトラ・ケプラーさんの下で長期にあるいは短期にボランティア活動をされた方々に感謝しています。特に次のような人々です。Isabela Avila, Meika Ball, Fabio Garbo, Amos Izerimana, Ruth Malaga, Sonia Mena, Paula Mikeli, Sisqa M'peti and Ivana Rudic.



INMP 事務所において左から Petra Keppler, Noriko Hashimoto, Behnaz Nikkahah, Miad Rashedifar, Ruth Malaga さんです。

INMP のロゴについて



このピンクと青のチョウチョのような形は、2008 年京都と広島で第 6 回国際平和博物館会議が開催された時の公式のロゴです。国際会議組織委員会では、京都造形芸術大学及び共同組織をした東北芸術工科大学に学生から募集したロゴを選ぶように依頼しました。このロゴが大賞を受賞しました。

デザイナーは東北芸術工科大学の斎藤優祐さんです。彼はピンクと青色の羽のようなハートの形をしたものを重ねることによって、平和は異なった価値観を持った個人の協力で実現ができ、平和は愛情を込めて注意深く育てていくべきで壊れやすいものであることを表現しようと思いました。彼は地球の象徴として青色を選び、また愛情と友情の象徴としてピンク色を選びました。彼はまたその色のぼかしを通して、平和の波のゆるやかで確実な広がり表現しようと思いました。斎藤さんのデザインは、2008 年立命館大学国際平和ミュージアムで開催された国際平和博物館会議総会のロゴとして喜んで採択されました。

編集後記



この特別号（英語版）は、ペトラ・ケプラーの協力を得てピーター・ヴァン・デュンゲン、安齋育郎が編集しました。また日本語版は、安齋育郎、山根和代が編集をしました。

今回は特集号でかなり量が多いので、次の方々が翻訳を担当しました。

赤松敦子さん、寺沢京子さん、藤田明史さん、山本美穂子さん、吉岡志朗さん、そして山根和代です。一字一句正確な翻訳というより、要約をしたところもあります。

INMP ニュースレターの原稿は随時募集しています。最大 500 語、1~2 枚の写真を添えて、下記アドレスにお送りください。

news@museumsforpeace.org.

日本語版の刊行に当たって

この INMP ニュースレター第 18 号は、INMP 開設 25 周年記念特集号として、第 9 回 INMP 大会（2017 年 4 月 10 日~13 日、ベルファスト〈北アイルランド〉）に間に合うように編集されました。

すぐに日本語版の編集に取り掛かり、山根和代さんを中心に左の「編集後記」に掲げた方々の協力を得て準備されました。ご協力に心から感謝します。その後、安齋育郎が全体をチェックしながら仕上げ作業に取り組みましたが、十分な時間的余裕がなく発行が大幅に遅れてしまいました。お詫び申し上げます。

本号には 25 年間の INMP の足取りが詳細に記述されており、また、関係諸団体、個人からのメッセージも紹介されていますので、歴史的な価値を持つものとしてお読み頂ければ幸いです、

(安齋記)

INMP の今とこれから

このニュースレター第 18 号には、INMP の決して平坦ではなかった 25 年史が紹介されています。21~36 頁の団体・個人からのメッセージを読むと、INMP の活動の成功面や今後への期待が伝わってきます。

しかし、その反面、INMP が現在直面している財政的・組織的困難は、INMP の運営のあり方にかかなり抜本的な改革を求めています。現在、ロイ・タマシロ（アメリカ）、クライブ・バレット（イギリス）、安齋育郎（日本）の 3 人が「戦略グループ」として、他の理事や諮問委員と協力しつつ、現状の打開と将来計画の策定に努力しています。その中ではハーグ事務所の閉鎖の問題も論議されており、INMP の再構築がそれなりの困難を抱えている状況を反映しています。皆さんが引き続き INMP に関心を寄せられ、今後の組織活性化にむけてご協力いただくことを期待します。（INMP 諮問委員 安齋）